



# スペイン語TLP メキシコ研修 報告書

(2022年9月4日～18日)

# Una singular experiencia del TLP (español) en México

Prof. Gregory Zambrano

El pasado mes de septiembre de 2022, junto a un grupo de 16 estudiantes pertenecientes a la Universidad de Tokio y participantes en el Programa Trilingüe (TLP), tuvimos la experiencia de visitar México durante dos semanas. El programa en principio contemplaba dos fases: una semana de actividades académicas, coordinadas con la Universidad Nacional Autónoma de México (UNAM), y una semana de inmersión en la cultura mexicana con visitas a importantes lugares históricos y culturales de ese país.

La primera parte se trató principalmente de un curso de idioma español intermedio, contentivo de elementos de comprensión auditiva, pronunciación, comprensión lectora y conversación. Fue un curso intensivo, ofrecido por el Centro de Enseñanza para Extranjeros (CEPE), perteneciente a la UNAM. Durante una semana nuestros estudiantes tuvieron la oportunidad de aprender y compartir la experiencia académica con sus profesores mexicanos, pero también de conocer aspectos relacionados con el arte, la historia y la cultura de ese país. Y de igual manera, participaron en un intercambio promovido por la Escuela Nacional de Lenguas, Lingüística y Traducción (ENALLT), también de la UNAM. Nuestros alumnos hicieron presentaciones en español e intercambiaron con los alumnos mexicanos que aprenden la lengua japonesa.

Al mismo tiempo, nuestros estudiantes pudieron recibir información y orientaciones en espacios emblemáticos, como el Museo Nacional de Antropología y El Colegio de México, así como el centro histórico, el Palacio de Bellas Artes, las ruinas del templo mayor, la casa-museo Frida Kahlo, etc. Esta experiencia les permitió poner en práctica los conocimientos del idioma español, adquiridos a lo largo de tres semestres de estudio intensivo en la Universidad de Tokio.

La segunda parte se complementó con un viaje de inmersión en la historia y en el valor cultural de algunas ciudades, como Querétaro, San Miguel de Allende y Guanajuato. De igual manera, tuvimos la oportunidad de visitar las ruinas arqueológicas de Cuicuilco y Teotihuacán. En síntesis, fueron dos semanas muy intensas en las que nuestros estudiantes pudieron convivir solidariamente entre ellos y, a la vez, interactuar con muchas personas en lugares públicos, en mercados populares y en espacios culturales. Pusieron en práctica sus conocimientos del español y se conectaron con la idiosincrasia, la amabilidad y hospitalidad de las personas a quienes fueron conociendo a lo largo de la estancia. También lograron apreciar diversas manifestaciones fundamentales de una cultura antigua como la mexicana, muy rica en su gastronomía, música, arquitectura y muchas otras representaciones del arte.

Después de estudiar tres semestres de español en la Universidad de Tokio y de tener esa oportunidad de visitar uno de los países que hablan la lengua que están aprendiendo, nuestros alumnos se convencieron de que el esfuerzo ha valido la pena y seguramente esta experiencia estimulará en ellos la continuidad de sus estudios de la lengua castellana y de la cultura hispánica.

Como profesor de los cursos del TLP y también como uno de los guías de nuestro grupo en México, considero que este viaje ha sido un verdadero privilegio. Los resultados de esta experiencia, sin duda alguna, servirán para acrecentar no solo la comprensión de la lengua y de la cultura, sino también para estrechar nexos de amistad con personas de aquellos países y comprender la importancia de la comunicación a un nivel global. Agradezco a las distintas dependencias de la Universidad de Tokio que hicieron posible esta experiencia, excelente desde el punto de vista académico y humano, que ayudará a nuestros estudiantes en su proceso de formación como excelentes profesionales.

# 謝辞

## 受田 宏之 (TLP委員)

スペイン語TLPは歴史が浅く、2022年度末に三期目の修了生が出る予定です。コロナ禍ゆえ、第一期生と第二期生はオンラインでの研修となりました。ミニ講演へのアクセスが容易になる等、オンライン交流ならではのよさもあるのですが、TLP生が一年半の間、スペイン語を集中的に学んできたのに現地でその成果を試すことができないこと、および私の研究フィールドであるメキシコの自由と豊かさを体感してもらえないことが、残念でなりません。今回、対面での研修が可能となり、参加学生がメキシコの優れた講師陣からスペイン語やメキシコの歴史を学び、協定校の学生と一緒にメキシコシティの史跡を訪れ、世界遺産のサンミゲル・アジェンデやグアナファトの旧市街を散策し、本場のタコスやポソレを堪能できたことは、スペイン語TLPに創設時からかかわってきた者として、実に感慨深いものがあります。

本研修は、多くの方々のご厚意により実現できました。まず東京大学の関係者として、本研修に限らずスペイン語TLPのプログラム全体を牽引されてきたGregory Zambrano先生、およびZambrano先生と一緒に研修に随行し、トラブルに適切に対処し学生に丁寧なアドバイスを与えてくれた博士課程院生の西藤憲佑さんのお2人に、この場を借りて御礼申し上げます。ほかにも、委員長の寺田寅彦先生をはじめとするTLP委員の先生方、国際研修プログラム全体を運営されている佐藤みどり先生、LAINAC（東京大学ラテンアメリカ研究センター）所長の和田毅先生、国際グローバルコミュニケーション研究センターの荒井裕美、漆原里子の両氏、さらに教育・学生支援部学務課教育改革推進チームと教養学部経理課経理チームの皆様には、研修の手続きや財政面で様々なサポートをいただきました。東京大学以外では、（株）ヴィジュアルノーツ・グランドツアー事業部の松本晃氏は、コロナ禍の大変な時期に、航空券と旅行保険を手配していただきました。

本来スペイン語で御礼を申し上げるべきところですが、メキシコでも多くの方々にお世話になりました。ピアヘス東洋の松枝勝利氏には、バスとホテルの手配、訪問先の検討からPCR検査への随行まで、きめ細かいサポートをいただきました。メキシコのことを知り尽くした松枝氏の助言がどれだけ助けになったかわかりません。東京大学の協定校の1つUNAM（メキシコ国立自治大学）については、CEPE（付属スペイン語学校）のMaría Reyes López、Luis Miguel Samperio、Laura Ogaz、Estefany Macías、Malú Mungía、Luis de Pabloの各先生方は集中講義を担当ないし準備してくださり、ENALLT（言語言語学翻訳学校）のElisa Akemi Shimazaki Miho、Yumiko Hoshino Tanaka、Shoki Goto Takashima、Kazuko Nagao（現弘前大学）の各先生方は日本語履修生との交流にかかわってくださいました。UNAMで日本語を学ぶ学生たちの日本文化への関心の深さとホスピタリティは、本研修における忘れ難い思い出の1つです。もう1つの協定校であるCOLMEX（メキシコ大学院大学）については、Carlos Alba Vega先生はミニ講演の中でインフォーマル経済に関するご研究を分かりやすくご紹介くださり、CEAA（アジア・アフリカ研究センター）のAmaury Garcia、Amaury Alejandro García Rodríguez、Satomi Miuraの各先生方と国際交流担当のXimena Marisol Varela Amaya氏は交流を調整してくださり、CEAAで日本研究に励む院生のみなさんは交流に快く参加してくださいました。本研修が、今後の両大学との関係の深化につながることを期待しています。最後に、国立人類学博物館をご案内いただいたINAH（国立人類学歴史研究所）のAlonso Guerrero Galván先生、ストリートチルドレンのうまれる原因とこの問題にどう取り組むべきかについて含蓄あるお話をいただいたEDNICAのBertha Bocanegra氏にも、学生たちと謝意を表したいと思います。Muchas gracias!!!

# 目次

巻頭の言葉 .....	2
謝辞 .....	3
目次 .....	4
日程表 .....	5
活動報告 .....	6
参加者一覧&一番おいしかったもの .....	9
参加者エッセイ .....	10
編集後記 .....	27

# 日程表

日	行程	宿泊先
9/4 (日)	成田集合、出発 メキシコシティ着、大型バスでホテルへ	Hotel PEDREGAL PALACE
9/5 (月)	午前：CEPEの授業ニコマ 午後：休憩	Hotel PEDREGAL PALACE
9/6 (火)	午前：CEPEの授業ニコマ 午後：人類学博物館 (Museo Nacional de Antropología)。Alonso Guerrero 教授 (INAH) のガイド付き	Hotel PEDREGAL PALACE
9/7 (水)	午前：CEPEの授業ニコマ 午後：COLMEX訪問。学内紹介とミニ講義 (Carlos Alba 教授、La Economía Popular について)	Hotel PEDREGAL PALACE
9/8 (木)	午前：CEPEの授業ニコマ 午後：UNAMの日本語履修生との交流。食事、プレゼン、ゲーム	Hotel PEDREGAL PALACE
9/9 (金)	午前：CEPEの授業ニコマ 午後：コヨアカン	Hotel PEDREGAL PALACE
9/10 (土)	午前：CEPEの先生のガイド付き歴史地区観光 午後：ホテルでストリートチルドレンを支援するNGO、EDNICAのBertha Bocanegra 氏のお話を聞く	Hotel PEDREGAL PALACE
9/11 (日)	クィクイルコ	Hotel PEDREGAL PALACE
9/12 (月)	大型バスでグアナファトへ移動、途中ケレタロ市で昼食、夕方にグアナファト市内散策	LA ABADIA PLAZA GUANAJUATO
9/13 (火)	大型バスでテキーラ醸造所のEL CORRALEJOなど近辺の観光	LA ABADIA PLAZA GUANAJUATO
9/14 (水)	大型バスでサン・ミゲル・デ・アジェンデに移動、途中DOLORES HIDALGOで昼食、サン・ミゲル・デ・アジェンデ市内散策	IMPERIO DE ANGELES SAN MIGUEL DE ALLENDE
9/15 (木)	大型バスでメキシコシティに移動、途中でテオティワカン遺跡見学、昼食。	REGENTE CITY
9/16 (金)	UNAMの学生とペアを組み、メキシコシティ観光。夜に大型バスで空港へ移動	
9/17 (土)	メキシコシティ発	機内泊
9/18 (日)	成田空港着、現地解散	

# 活動報告



## CEPEでの授業

二週間のメキシコ研修のうち最初の5日間は、UNAMに併設されているCEPE (centro de enseñanza para extranjeros) という施設で、2クラスに分かれてスペイン語の授業を受けました。毎日9:00~11:00が文法の授業、11:30~13:30が文化の授業でした。二つの授業は別の先生が担当してくださいました。

私のクラスの文法の授業は毎回クラスメイト同士で質問をシェアすることから始まり、その後現在完了や接続法の文法演習を行ったり、ゲームをしたりしました。最終日に、言葉を使わずにスペイン語の文章を伝えるゲームをし、言語の壁があっても人はコミュニケーションを取れるということを教わったのが印象的でした。

文化の授業ではメキシコ革命の時代を中心に、政治の状況とその時期の特徴的な文化の関連について学びました。メキシコの政治・文化については知識の不足もあり、先生の早いスペイン語を聞き取るのに苦しみました。詩についての説明のところなど、ほとんど分からないところもありました。しかし日を追うごとに理解できる部分が増えていき、自分のリスニング能力の向上を実感できてとても嬉しかったです。

5日間の授業を通してスペイン語を集中的に学ぶことができ、皆飛躍的に成長したと思います。時差ボケの眠気と戦いながらの4時間の授業は大変でしたが、とても良い経験となりました。(佐野)

## 国立人類学博物館訪問

9月5日(月)には、国立人類学博物館 (Museo Nacional de Antropología) を訪問しました。一階が考古学、二階が民族誌、というようにテーマ、時代ごとに展示室が分かっている巨大な博物館で、私たちは時間の都合で一階のみ見学しました。

ガイドを担当してくださったのは博物館のAlonso Guerrero教授という方で、私たちの話を聞いていただいたり、質問にも答えていただいたりと、積極的にコミュニケーションをとってくださったのが印象に残りました。CEPEの授業もまだ2日目で、スペイン語の聞き取りには苦労したものの、少しずつ話を聞いたり、自分の質問したいことを言ったりできるようになっているのを実感して嬉しかったことを覚えています。

見学した展示のなかで特に興味を引いたのは、アステカの部屋で見たテノチティラン (Tenochtitlan、こういうつづりはナワトル語、ということも学びました) の広場の再現模型です。テノチティランはアステカ王国の首都ですが、場所かというと今日のメキシコシティにあたります。そして模型で再現されていた神殿のある場所が、ちょうど今のソカロのある場所なのだそうです。CEPEの授業の最終日にはメキシコシティの歴史地区を訪問しましたが、そのときにもTemplo Mayorという神殿跡があることを紹介していただきました。滞在中に学んだ知識が繋がった瞬間でした。(小野)

## COLMEX訪問

現地時間9月7日(水)午後、COLMEXを訪問しました。COLMEX (El Colegio de México)とは、「メキシコ・シティ南部に位置するメキシコおよびラテンアメリカ最高峰の人文・社会科学系の研究・教育機関のひとつ」(UTokyo LAINAC)であり、社会科学と人文科学の研究・高等教育を目的とした公立大学です。

今回の訪問では、はじめに図書館の案内を受けました。この図書館は約77万冊の蔵書を誇るラテンアメリカでも重要な図書館のひとつであり、世界各国の資料が所蔵されています。大学と同様に長い歴史をもつ図書館ですが、改装や増築を経た内部はとても美しく、その膨大なコレクションに加え、非公式な集まりの場や会議室など、研究に専念できるような環境が整えられていました。

その後、Carlos Alba教授によるLa Economía Popular (La Economía Informal、日本語訳：インフォーマル経済)についての講演を受けました。La Economía Popularとは、行政の管理外で行われ、国家によって記録されず、統計にも反映されないような経済活動をいいます。講義ではこの概念に対する基本的な説明から始まり、これらと行政の関係性、またグローバル化による影響について講義を受けました。講義後には、Torなどをはじめとした匿名性を担保するテクノロジーが発達する中、デジタル空間でのLa Economía Popularについて、また日本のヤミ市との比較で、La Economía Popularの今後の推移について質問しました。(板橋)

## UNAM訪問

研修5日目にUNAMの学生との交流の機会がありました。個人的には、楽しさと言う観点で言うと一番よかったと感じています。実は、5日間通ったCEPEと言うスペイン語の語学学校は、UNAMに併設されているものです。CEPEの校舎は、日本の中高のようなイメージであったのに対し、UNAMのキャンパスには、敷地の中に広がる雄大な芝生の公園や、一面にわたる巨大な壁画が描かれた図書館などがあり、まさにいわゆる「大学」と言うイメージそのもので、敷地内に入った瞬間心踊る感覚がありました。

UNAMの学生との交流は、最初にメキシコ日本両国各4名ずつがステージに出てプレゼンしたのち、日本の学生一人につき、UNAMの学生が3-8名程度でグループを形成して、自由に話し合うと言うようなものでした。

まず日本の学生はスペイン語、UNAMの学生は日本語にてプレゼンを行ったが、UNAMの学生の日本語のレベルの高さにとても驚かされました。4名とも、よく準備されたスライドと、流暢な語り口で、惹きつけられるような魅力がありました。私自身もプレゼンを行ったが、まだまだ改善の余地があると感じたため、今後のスペイン語学習へのバネにしていきたいと思います。

また、グループセッションにおけるUNAM学生の熱意の高さに驚かされました。私たち日本人学生がそれぞれ一人であったのに対し、UNAMの学生が何人もついてきたため、かなりの質問攻めにされました。また、彼らの関心分野や夢を聞いても、かなりハイレベルな日本語文学の研究をしている人や、日本に留学するために日本語を勉強していると言うような人もいました。そもそも彼らが、日本語を勉強し始めたのも、多くが日本文化をそもそも好きだったから、と言うようなモチベーションであったことに心底驚かされました。このように新しい発見が多かったUNAM学生との交流は、大変良い思い出となりました。(飯沼)

## Coyoacán訪問

CEPEでの最終日の午後、私たちはメキシコシティ南西部にあるCOYOACANを訪れました。ここではフリーダ・カーロ美術館の見学、コヨアカン市場周辺での自由行動、そして学生全員での夕食、と大きく分けて3つの活動を実施しました。

美術館は「青い家」とも呼ばれていて、画家フリーダ・カーロと詩人ディエゴ・リベラの夫妻の生前の住居を美術館に改装したものです。私たちは未完成の作品も含む、彼女の数々の作品を鑑賞しました。また、展示されていた家具や生活用品などから当時の生活感が感じ取られました。

市場では極彩色の売り場に圧倒されました。青果や菓子、衣服、装飾品などあらゆるものが揃っていました。売り手は熱心に客を呼び込むでもなく、くつろいでいたり他の店の方と談笑していたりしていました。賑やかではあるものの、ゆっくりと見たい店を回ることができました。店の人々とのやりとりも通して、それぞれが思い思いの品を購入しました。

夕食はコヨアカン広場の近くのレストランで食べました。全員で一つの長いテーブルを囲む食事スタイルにも慣れてきていた頃です。店側の厚意でドリンクが1人2つ用意されたが、グラスの大きさに私たちは驚かされました。私は、トウモロコシと豚肉を煮込んだスープであるポソレを食べました。温かく歓迎されたのが印象に残りました。(山下)

## EDNICAの方の講演

9月10日の午後にストリートチルドレンの支援活動を行うNGO、EDNICAのBertha Bocanegraさんのお話を伺いました。

メキシコには生きるだけで精一杯で生活を改善、発展させていくことができない状態の人々が多く存在していて、早期出産などによりまた貧しい子供たちが生まれてしまうという循環が起きているということでした。

EDNICAは政府、警察、学校といった公的機関では行えない取り組みを行っており、その取り組みをいくつか紹介してくださいました。その一つは薬物使用者の更生支援で、政府はお金がかかるため十分に行っていないというお話がありました。また学校教育では貧困家庭への教育が不十分で、成績不振から留年して結局退学してしまう子供も多いそうです。EDNICAでは成績のためではなく実際に自身の生活を向上させるための論理的思考力を教えているということでした。

最後にはボランティア活動の紹介もあり、東大の先輩で支援活動に参加した方々もいるとのことでした。短い時間ではありましたが、私たちからの質問にも丁寧に答えてくださり、支援活動に関して知ることができる貴重な機会となりました。（森原）

## Cuicuilco見学

Cuicuilcoは、メキシコシティにある遺跡で、テオティワカンなどと比べ有名ではないが、シクレ山噴火により溶岩の下に埋まってしまいうまで栄えた地です。この遺跡ではメキシコシティに特徴的な地形とそこで生まれた文化を学ぶことができました。さらにメソアメリカで地域や時代を超えて共通する文化や信仰が見つかっているということも興味深かったです。

メキシコシティはシクレ山をはじめとする多くの山や丘に囲まれた盆地で、大きな湖がありました。湖は現在では市街地となっているが、この地形はピラミッドの上から確認することができました。また、Cuicuilcoの歴史に重要なシクレ山の溶岩は遺跡のあらゆる場所で見られました。Cuicuilcoの人々はこの自然を大切なものとして崇拝していたようです。例えば、ピラミッドの形はシクレ山を象徴して円形であり、火山と関係する火の神様の像が多く発掘されています。シクレ山の噴火初期、Cuicuilcoの人々は火への信仰と湖の水の入手のしやすさのため、すぐには逃げなかったといえます。

Cuicuilcoの人々は溶岩により元の土地に住めなくなると、後のテオティワカンに移住したそうです。そのためか、Cuicuilcoの文化にはメソアメリカの他の地域にも通じる部分があるようだと感じました。火の神の像は他の地域でも見ついているほか、証拠が少ないため詳しく解明されていないピラミッドの役割も、他の文明と同じように儀式のために使われたと推測されているそうです。

ガイドの方によると、Cuicuilcoにはまだ謎も多く残っているようで、当時の文化についてさらに解明してほしいと思いました。（田中）

## Guanajuato滞在

9日目の9月12日、メキシコシティからバスでおよそ5時間かけてグアナファトという都市に移動しました。グアナファトという名前は、先住民の言語で「カエルがいる場所」という意味だそうで、お土産屋さんにもカエルのグッズがたくさんありました。

グアナファトは、何よりピピラの丘という高台から見たカラフルな街並みが有名です。高台にはロープウェイを使っても登れますが、私たちは歩いて登りました。歩いて登った分、私たちの目にはより一層綺麗な光景が広がっていました。映画「リメンバーミー」の舞台にもなったとされ、登場人物のモデルとなった人の銅像も見られた他、一角にはかの有名なドンキホーテの銅像もありました。

他にも、「Callejon de Beso(口づけの小道)」というロマンチックな伝説がある場所にも行きました。このように、グアナファトは見所がたくさんあるとても良い街でした。ただ、野良犬が多く、野良犬注意の看板もあり、少し怖かったのを覚えています。

次の日にはテキーラ工場に行きました。そこではテキーラの作られる過程などが見学できた他、テキーラが世界に広まった経緯やテキーラ工場を営んでいた人たちの歴史なども学ぶことができました。工場内にはさまざまな名言(迷言)が書いてあり、とても興味深かったです。（細野）

## San Miguel de Allende滞在

San Miguel de AllendeはGuanajuatoとCiudad de Mexicoの中間辺りに位置している都市で、その歴史地区は世界遺産にも登録されています。私たちはそこで、石畳の敷かれたコロニアル風の街並みを散策したり、マーケットでお土産を購入したりとゆったりした時間を楽しみました。つい先日まで滞在していたGuanajuatoに比べると人出も少なく、静かで落ち着いた町という印象を受ける町でした。

しかし、私たちがSan Miguel de Allendeを訪れた9月14日はいつもと一味違っていました。広場でメキシコ独立記念日のセレモニーが行われていたのです。颯爽と馬に跨るカウボーイ風の衣装を纏った人々、独立を祝う挨拶に対する、割れんばかりの拍手と歓声、そしてことあるごとに響く「¡Viva México!」の掛け声…。セレモニー後に、少年少女の鼓笛隊の演奏とともに広場を回遊する馬と騎手、そして彼らに声援を送る人々の姿は一生忘れられない景色となりました。

見るからに外国人の私たちが現地の方の目にどのように映っていたかは分かりません。それでも一緒に写真を撮ったり、手を振ったりしてくれたことから、勝手ながら受け入れられていると感じてしまいました。思えば、メキシコで自分が外国人であるがゆえに特別な扱いを受けた記憶があまりありません。様々なルーツを持つ人々の“mezcla”であるメキシコならではの異邦人に対する懐の深さをSan Miguel de Allendeでも垣間見ることができたかもしないと思いました。（中村）

# 参加者一覧&一番おいしかったもの

## 小林 龍和 文科二類 2年 (文学部美学芸術学専修課程に進学予定)

Me gusta mucho la enchilada. Son tacos en salsa. La carne y otros ingredientes se envuelven en tortillas y se cubren con salsa de queso o chile.

## 玉岡 空馬 文科一類 2年 (法学部に進学予定)

La comida que me gustó más es la barbacoa. El término barbacoa hace referencia principalmente a la forma tradicional para preparar carne al vapor y en sus propios jugos. Tiene un sabor ahumado y es muy rico.

## 森原 瞭 文科二類 2年 (経済学部に進学予定)

Tacos al pastor: Los comí en un restaurante pequeño en Guanajuato. Son típicos de Mexico y son tan ricos que yo fui al mismo lugar por dos noches.

## 森田 輝 文科二類 2年 (経済学部に進学予定)

Pambazo es como bocadillo y hay papas con chorizo dentro del pan. Del pan es frito y se sumerge en salsa.

## 高橋 哲伸 文科三類 2年 (教養学部教養学科地域研究分科に進学予定)

Tacos de milanesa de res al gratin: Son un tipo de tacos de res gratinada. Para llamarse milanesa, no es tan italianos.

## 荒木 有志 理科一類 2年 (工学部機械情報工学科に進学予定)

Tacos de Milanesa de Res al Gratín: Es una masa crujiente con un tipo de pasta de judías, carne frita y una salsa gratinada.

## 板橋 一真 理科二類 2年 (理学部生物情報科学科に進学予定)

Tacos de bistek, que es tacos con res. Había la salsa roja, la salsa verde. Me gustaba la salsa verde, porque era muy cremosa y un poco picante.

## 木戸 彩華 理科二類 2年 (薬学部に進学予定)

Mi comida favorita en México es guacamole. Guacamole es una salsa mexicana hecha de aguacate, cebolla, chile y tomate. Comes guacamole con nachos y es muy delicioso.

## 飯沼 誠人 文科一類 2年 (法学部に進学予定)

La comida favorita es enchilada. Las enchiladas son un plato mexicano a base de tortillas. Las enchiladas se enrollan y se cubre con chile, pollo y verduras. Hay muchas variantes. Las enchiladas son un poco picantes, pero con la acidez de la salsa de tomate y un toque de dulzura, tienen un sabor casero mexicano.

## 田中 梨咲子 理科一類 2年 (工学部機械情報工学科に進学予定)

Entre las varias salsas que probé en México, el mole es mi favorita. El mole es un poco picante y tiene un sabor muy complejo. Es muy sabroso con pollo y arroz.

## 細野 希美 理科二類 2年 (農学部動物生命システム科学科に進学予定)

La Chilaquila: Es un plato de totopos con salsa verde o roja y queso. Cuando comemos los totopos solamente, son crujientes. Pero, la chilaquila no es crujiente. Fue muy rica.

## 中村 咲喜花 文科二類 2年 (経済学部に進学予定)

Pozole: Es sopa tradicional desde Azteca y especial para celebrar fiestas en México. Tiene tres sabores: rojo, blanco, y verde. Ingredientes principales son maíz y cerdo. Podemos agregar chile, queso, cebolla, chicharrón. Dicen que pozole en México es como ramen en Japón. Cada restaurante tiene sabores diferentes, por ejemplo, aceitoso, amargo, picante, dulce etc. ¡Todas eran muy delicioso y quiero probarlos otra vez!

## 佐野 綾 文科三類 2年 (教育学部比較教育社会学コースに進学予定)

Quesadilla de queso de Oaxaca: Queso de Oaxaca es intercalado en una tortilla suave. Es una platilla simple. Me gustaba mucho el queso porque era muy rico y extendió cuando comí.

## 篠原 優輝 文科一類 2年 (法学部に進学予定)

Chiles en nogada: Chiles en nogada es un plato mexicano que sólo se puede comer en septiembre, el mes de la Independencia. Chiles en nogada consiste en carne picada en chiles verdes, sazónada con salsa blanca, granada y perejil. Este plato tiene un sabor que no se puede experimentar en Japón. ¡Pruébalo cuando visites México!

## 小野 新之介 理科一類 2年 (理学部情報科学科に進学予定)

Chilaquiles: es un plato tradicional de tortillas guisadas en salsa roja o verde. El que yo comí se acompañaba con pollo, verduras y queso. Puede ser una manera de tomar una variedad de ingredientes en una sola comida, ¡lo recomiendo!

## 山下 順正 理科一類 2年 (理学部化学科に進学予定)

Me encanta Sopa Azteca. Esta es una sopa de caldo de chile de tomate con tortillas. Se incluye pollo, aguacate y queso. Las tortillas estaban suaves en la manera perfecta, y fue delicioso.

# Rojo, blanco y verde

小林 龍和

メキシコ文化について説明する際に必ず触れられるのが、先住民文化と外来勢力であるスペインの文化の共存、融合である。確かにメキシコの街中では、メキシコの先住民の伝統的な衣服や工芸品が売られている市場の真横に、スペインの国旗の構成色である赤と黄色で塗られたヨーロッパ風の建物が佇んでいるような光景がよくみられるほか、メキシコ音楽も先住民の音楽にヨーロッパのラテン音楽の諸要素が取り入れられながら発展したジャンルが多く存在する。また食文化についても、例えばメキシコ料理の代表格であるタコスなどはメキシコで紀元前から食べ継がれてきたトウモロコシや唐辛子と、スペインがもたらした西洋の肉料理やタマネギが組み合わせさせた結果誕生したものである。このように、メキシコとスペイン文化の関係が垣間見えるような瞬間も滞在中には多々あり大変面白かったのだが、それ以上に私が個人的に印象に残ったのがメキシコ人たちの、メキシコ国民としての意識の強さだ。今回私がそれを肌で感じる事ができたのは、我々がメキシコに行ったのが9月前半だったからという理由が大きいだろう。その時期はちょうどメキシコの独立記念日の直前だったこともあり、街の至る所からメキシコ人の愛国心、メキシコ人というアイデンティティに対する誇りを強く感じた。商店街やレストランがメキシコ国旗の構成色である赤、白、緑で飾り立てられていたのはもちろんのこと、田舎の小さな民家や街中を走る乗用車までもがメキシコ国旗を掲げていた。アイメイクを赤白緑の三色にしている(白い部分は何も塗らずに地肌の白さを活かすという高度な技を使っている)タコス屋の女性も印象に残った。OXXOという名の、圧倒的な店舗数を誇るコンビニチェーンでは、メキシコ国旗の三色にデザインされたゼリーが売られていた。見た目重視だったらしく味はほぼしなかったが鮮やかな色彩がとても綺麗だった。また、今回食べる機会を逃してしまったが、チレスエンノガーダという食べ物が人気らしい。緑の唐辛子(辛くないと言われたがメキシコ人の「辛くない」は当てにならない)に白いソースをかけ赤いザクロをちりばめ国旗の三色を表現した料理であり、独立記念日の位置する9月によ

く食べられているようだ。このように、景観や食べ物などにメキシコという国のアイデンティティが非常に色濃く反映されていた。

こうして独立記念日に合わせて国民のメキシコに対する愛が爆発するのは、やはりスペイン勢力を追い払い外部からの支配からの独立を勝ち取ったという歴史が国民としての誇りや連帯感を一層掻き立てているからという理由が大きいだろう。独立記念日の2日前、サンミゲルアジェンデという町ではソンプレロをかぶり馬に乗った数十人もの人々が広場に集まっていた。中心には市長の姿もあり、演説を行って人々を盛り上げていた。かつてスペイン植民地政府を追い払い独立を達成するための戦争では男女関係なく馬に乗って戦ったという。この行事はその勝利を祝うためのイベントなのだ。しばらくすると馬に乗った集団は広場を去り、辺りには馬糞のみが残された。これから独立を祝して街中を闊歩するらしい。歓声を浴びる旗手たちの姿は独立戦争の戦士たちの姿を想像させた。

また、首都のメキシコシティもサンミゲルアジェンデに劣らず特に大きな盛り上がりを見せる。高速道路の周辺には首を真上に向けなければ見ることができないほど巨大な国旗が街中にたなびいておりその光景は圧巻だ。滞在していたホテルでは、夜な夜な外から小さな爆発のような音を聞き、銃声なのではないかと怯えていたが、実際は独立を祝うための、光の出ないタイプの花火であることが後に明らかになった。独立記念日前夜になるとメキシコはいよいよ大騒ぎである。ソカロと呼ばれるメキシコシティの中央広場に何万人もの人々が詰めかけ大統領の演説を聞いたり小麦粉を投げたりする。私もすべての荷物をホテルにおいて身一つでソカロに向かったが、モタモタしている間にメインイベントである花火(今回はちゃんと光も出る)や、メキシコ万歳と皆で叫ぶ一斉コールは終わってしまっていた。満足げな表情で帰っていく人々をかき分けながら広場へと足を運んでみたが、もはや誰も小麦粉を投げておらず、黄緑色の作業着の人々が掃除に追われているだけで、見どころといえばイルミネーションと、ピンク色の綿あめを売るおじさんぐらいのものであった。30分遅れではあったが、一応広場の中心でメキシコ万歳とつぶやいておいた。いつかもう一度9月にメキシコを訪れた際には時間に余裕を持ってソカロに到着し、メキシコへの賛辞を叫びたい。

一方ソカロから少し離れた大通りは深夜0時を過ぎているというのに人でごった返っていた。一年に一回の祭典を満喫する人々の表情は非常に幸せそうで、露店に群がる互いに見ず知らずの人々もメキシコへの愛を媒介として一体感を共有している様子だった。日本ではたとえ建国記念の日だろうとこのように町全体が愛国ムードに包まれることはないの、とても新鮮な経験だった。日本においても、一年に一回ぐらいは皆で白と赤丸のアイメイクをして日の丸弁当を食べるのも一興かもしれない。



# 温かさの国 メキシコ

玉岡 空馬

メキシコと聞いてどのようなイメージを抱くだろうか。サボテン、タコス、ソムブレロ、テキーラ。国としての雰囲気と言えば、明るい、情熱的、テンションが高い、などであろう。2週間という長くはない期間の滞在であったが、私にとってメキシコという国はそのイメージ通り、もしくはイメージ以上に陽気な国であったと断言できる。なぜそう感じたのか、特に印象に残った私の現地での体験のいくつかに触れながら述べていきたい。

本研修では、メキシコシティをはじめとしたコヨアカン、グアナファト、サンミゲル・アジェンデといった観光地巡りに加え、メキシコ国立自治大学(UNAM)内にあるCEPEという語学学校で授業を受けたり、UNAMやメキシコ大学院大学(COLMEX)において現地の学生と交流を行ったりした。私自身中南米に行くのは人生初めての経験で、冒頭に述べた楽しそうなイメージとは裏腹に、麻薬や犯罪のイメージも強いメキシコであるため、多少の不安を抱えながらの渡航であったが、今振り返ってみると危険な目に遭うことも無くメキシコを満喫することができたと思う。

一つ目に印象に残ったこととしては、レストランやホテルでの対応の柔軟さだ。特にホテルでは、夜遅くでも氷や紙コップ、追加のタオルまでも部屋まで届けてくれた。また、レストランではどのレストランでも、私たちが19人という大所帯にも関わらず、注文を一人一人個別にとってくれて会計も個別に行ってくれた。日本と違いチップ(スペイン語ではpropina)の文化が根付いているメキシコではあるが、ここまで丁寧なサービスに正直驚きを隠せなかった。というのも、チップ文化の生みの親でもあるアメリカに行ったことがあるが、そこではここまで細かいサービスは無かった。「おもてなし」と謳う日本でさえも19人の個別会計までは受け入れてくれるレストランは数少ないだろう。日本の大手のファミリーレストランでは4人でさえも個別会計を断られることもある。フレンドリーな人柄の人が多いイメージの強いメキシコであるが、その特徴にチップ文化が合わさり、訪れる客を十二分に満足させることのできるサービスが成立しているのだと感じた。

二つ目に印象に残ったことは、サービス業に従事する人だけでなく、現地の人の温かさである。CEPEやUNAM、COLMEXの現地学生、人類学博物館(Museo Nacional de Antropología)でガイドをしてくださったAlonso Guerrero INAH教授、2週間付きっきりで私たちの移動を手伝ってくれた運転手のManuelなど、挙げようと思えばキリがないほどの数の人々が私たちの研修を手助けしてくれた。そして全ての関わった人が常に笑顔で優しく私たちに接してくれた。その中でも特に印象深い出来事がある。最終日にUNAMの学生

と自由観光をした際に、UNAMの学生の1人が両親を連れてきた。その場には私を含め4、5人の東大の学生とUNAMの学生数名、合わせて10名以上の学生がいた。もちろんその両親と私たちは初対面であったでも関わらず、一向をXochimilcoという運河を中心として各地に島が点在する観光地に案内してくれて、運河をめぐるボート代を出してくれたりと、ボート上で、市場で買った食料をもてなしてくれたりした。帰り道も30分ほどの道のりを車で送迎してくれた。私はこの両親との経験が最もメキシコ人の温かさを映し出しているなど感じた。

ここまでいくつかのメキシコ人の優しさを証明するエピソードを述べてきたが、それは私がメキシコで体験した全てではなく、ここでは紹介しきることができないほどもっと多くの経験がある。メキシコという未だ発展途上の国ではあるが、異国の地からきた我々を温かく、最高のおもてなしで受け入れてくれたと思う。私は勇気を出してこのTLP(トライリンガル・プログラム)というプログラムに飛び込み、メキシコ人達の温かさを肌で感じることででき本当に良かったと思う。しかしながら、何より私と身近な立場で私のスペイン語学習を支えてくれたのは、TLPの参加学生の仲間やGregory Zambrano先生、同行してくださった西藤さん、受田先生である。この教授の方々の支えがなかったら、私はここまでスペイン語をやりきりメキシコを訪れたいと思うことはなかったし、この学生メンバーでなかったら私のメキシコ生活はここまで充実していなかった。メキシコという国の温かさに触れ、改めて身近に自分と共に歩んでくれている存在のありがたみを再認識することができた。この2週間は私の人生の中で色濃い思い出として残り続けるであろう。また機会があれば、この「温かさの国メキシコ」を訪れたいと思う。

本研修に関して尽力してくださった皆様、本当にありがとうございました。そして、同行してくれた学生の皆さん、本当にありがとう。



# メキシコで感じた人々の 温かさ

森原 瞭

今回の研修の以前に私がメキシコという国に対して持っていた印象は貧富の格差が激しい、麻薬組織などの存在により治安が悪い、というネガティブなものが多くありました。

(一般の人々は陽気で優しいとは思っていましたが) 今回の2週間の研修ではメキシコのほんの一部の側面しか知ることができず、暗い側面に関しては道で乞食の方々を目にしたリ、ストリートチルドレンの支援の現状についてお話を聞いたりするなどのみで肌身で感じることは多くありませんでした。もちろんメキシコの暗い側面を無視することはできませんが、このエッセイでは主に私が感じたメキシコの人々の温かさや国の良さについて書きたいと思います。

まずメキシコで感じたのは、ほとんどの人が話をよく聞いてくれるということです。自分はスペイン語で話すときはどうしてもたどたどしくなってしまうのですが、それでも突き放されたり冷たく対応されることはほとんどありませんでした。特にUNAMやCOLMEXの生徒たちは日本に興味を持ってくれていたのですぐに仲良くなれました。また、メキシコの人々は全体的に口頭でのコミュニケーションを多く行っているため会話に慣れているなど感じました。日本ではテキストメッセージで済ませるところを電話で知らせていることが多く、良くないことですが運転中に通話する人の姿も良く目にしました。

また印象に残っているのは空港付近の建物に書いてあった“Ser mexicano es un orgullo” (メキシコ人であることは誇りである) という言葉です。実際にあくまで私があった人の中ですが、メキシコの文化、特に食に誇りを持っている人が多くいました。私が「メキシコ料理も好きだけど日本料理が恋しくなることもあるよ」と言ったら、「そうだね、でもやっぱりメキシコ料理が最高だね?」と言われたり、自分が見た目で敬遠していたfrijol negroのタコス「せっかくメキシコに来たんだから食べなきゃ」と半ば強制的に食べさせられたり(食べてみたら意外にもおいしかったです)ということがありました。

他に印象に残っているのは音楽が日本よりも圧倒的に人々の生活に結びついているということです。レストランで当たり前のようにmariachiの音楽隊が演奏してくれたり歌ってくれることには驚きました。最終日には私たち日本人学生とUNAMの学生でXochimilcoでtrajinera(ボート)に乗る機会がありました。そこでUNAMの学生たちはレゲトンからLuis Miguelの30年以上前の曲に至るまで実に沢山の曲の歌詞を覚えていて熱唱しながら踊っていたのが印象的でした。私たちはその曲の多くを知らなかったのであまりついていく



ことができませんでしたが楽しい時間を過ごせました。(日本の曲も歌いました)

人種差別については私の経験のなかでは感じることはほとんどありませんでした。CEPEの授業ではいまだ先住民に対する差別が残っていると教わり、今回の研修中には先住民の方々と関わったり目にする機会がなかったのでその点については感じることはできませんでしたが、今回訪れた場所では人種に基づく暴力や暴言を目にすることはなく、多様な人種を受け入れる雰囲気を感じました。もちろん所得など見えない部分の格差はあっても、少なくとも見える差別は少ないように感じました。私たちアジア人に対しても直接的な差別を感じることはなく、珍しいからか、またはBTSなどK-POP人気が高まっているからか好意的に声をかけてくれる人にも出会いました。

今回の研修は語学研修でもあるのでスペイン語についても触れておきたいと思います。先にも触れた通り、メキシコの人々は話をゆっくりでもよく聞いてくれたのでこちらの言いたいことが全く伝わらない、ということはありませんでした。(ホテルなどでは英語で意思疎通をすることもありました) また、CEPEのスペイン語の授業では積極的な発言が求められたため、自然とスピーキングの能力が向上してその後のメキシコ生活に活かされたと感じています。私は英語で話す時についミスを気にしてしまいがちですが、スペイン語ではミスをするのを当たり前だと思って積極的に話せるということもプラスに働きました。ただしリスニングの部分ではかなり実力不足で、人類学博物館のガイドやCOLMEXでの講義で理解できなかった部分が多かったのは残念でした。1年半のスペイン語学習を通してスペイン語の学習そのものに楽しさを感じられるようになったので今後も趣味としてのスペイン語学習を続けて次にスペイン語圏を訪れる時に活かしたいと思います。

最後になりますがこの研修を計画、引率して下さった受田先生、サンブラノ先生、西藤さん、そしてTLPのクラスメイトたち、メキシコで関わった全ての人たちに感謝申し上げます。

## 森田 輝

1年生の時私がTLPへの参加を決めた理由は主に二つある。まずは、将来海外で世界中の人と活動したいという自分の目標を実現するために、英語だけではなく他の外国語も使いこなせるようになりたかったからだ。そして第2に、2年生の夏にメキシコでの国際研修に参加できることが非常に魅力的であったからだ。TLPコースはコマ数が多いため、他の授業との両立が大変な時期もあったが、メキシコ研修をモチベーションにTLPコースをやり遂げることができた。

私は小学校4年生から中学1年生まで、マレーシアに住んでおり、当時は周辺の国々によく家族で旅行もしていたので、東南アジアの街の雰囲気や文化にとっても親しみがある。そのため、今回の研修では同じ途上国であり、近年急激な成長を遂げている東南アジア諸国とメキシコを比較する場面がよくあり（マレーシアに住んでいたのは少し前のことなので単純に比較はできないかもしれないが）、自分なりの視点でメキシコについて学ぶことができ、非常に興味深かった。

高層ビルや高級ショッピングモールなどが立ち並ぶ高級エリアのすぐ側に広がる、インフラの整備も未発達で衛生環境も良いとは言えない過密状態の住宅街。道端で小さい子供を連れながら、外国人観光客に対して物乞いをするお母さんたち。交通ルールをきちんと守らずに危ない運転を繰り返す人々。これらの光景は両地域で非常に似ており、違う大陸であっても世界中の途上国に共通する問題や状況は共通していることを改めて実感することができた。もちろん、両地域が持つ文化や歴史は異なるので、相違点も沢山あった。世界文化遺産への登録数の多さからも分かるように、メキシコは遺跡や歴史的建造物などが非常に多く、メキシコ市内であってもメキシコの歴史を感じることでできる場所が沢山あり、メキシコの魅力の一つであると感じた。また、マイノリティー（特に先住民）の問題が非常に深刻な社会問題であり、今でも先住民は迫害や差別を受けていることを語学学校、博物館、遺跡などさまざまな場所で聞き、東南アジアより（少なくともマレーシアより）も植民地時代の影響がいまだに強く残っていると感じた。マイノリティーの問題について先住民のルーツを持つメキシコの人々から直接お話を聞くことができたのも貴重な体験だった。

このように二つの地域を比較しながら、2週間メキシコを満喫することができたのだが、この研修を通して私の中で最も強く印象に残ったのは、メキシコ人の温かく優しい人柄だ。語学学校、ホテル、観光地、レストランなどで出会った多くのメキシコ人が、初対面とは思えないほど親しく会話をしてくれたり、興味津々に日本や私たちのことについて聞いてくれた。日本で「おもてなし精神」という言葉をよく聞くと思うが、日本の社会ではその概念が礼儀やマナーとして広

まっている側面が少しあると思う。一方で、そういった形式的なものではなく、メキシコ人は純粋に私たちに楽しんでほしいと思いながら接してくれていることを強く感じ、何度もその優しさに感動する場面があった。例えば、Guanajuato市内でお昼ご飯を食べる場所を探すため、道を歩いていた若い女性におすすめの場所を聞きに行ったところ、その女性は最終的にそこから徒歩30分弱離れたオススメのレストランまで案内してくれるということがあった。これ以外にもエピソードは沢山あるが、一番印象に残っているのは最終日。この日、私たちはUNAM（メキシコ国立自治大学）の生徒とペアになり、メキシコ市内を自由に観光できたのだが、そこで私はSusanaと彼女の家族にソチミルコを案内してもらった。（ソチミルコは世界遺産に指定されており、アステカ時代以来の独特な雰囲気を持つ地域である。）Susanaの両親がかつて住んでいた場所であったためソチミルコについて非常に詳しく、外国人観光客だけでは行けないようなローカルマーケットに連れていってくれたり、それまでの滞在では見たことのない食べ物を沢山ご馳走してくれたり、最後には3時間のクルーズでメキシコの音楽やダンス、自然を体験させてくれた。この1日のために、Susanaが家族全員で、私が最高の最終日を過ごせるよう色々工夫してプランを考え、楽しい時間を作ってくれたことが何よりも嬉しかった。

最後に、TLP生の皆さん、斉藤さん、Gregory先生、受田先生、2週間本当にお世話になりました。皆さんのおかげで、充実した時間を過ごす事ができ、本当に感謝しております。



# 無計画に臨み解像度を上げる

高橋 哲伸

今回のメキシコ研修に際し、私は事前にほとんど何も調べずに臨んでしまった。タコスとサボテンの画を頭に浮かべながら、慌ただしく『地球の歩き方』をめくるうちに、機体はメキシコシティ国際空港に着陸した。ここからは、研修中に訪れた3都市について、予備知識0の男の率直な感想を書いていこうと思う。

一番長く滞在したメキシコシティは最後に回すとして、研修も二週間目に入り、折り返しを迎えるという時期に訪れたのが、グアナファトという都市である。実はこのグアナファトが、今回の研修の中で一番気に入った。伝統的な情緒を漂わせる一方で、まるで産声をあげる赤ん坊のように、店も人もエネルギーに満ち満ちていた。

音楽隊の歌が鳴り止まない中心地の広場では、その一角にあるレストランのオーナーが、我々を引き寄せるためなら手段を選ばず、競合する他店をボロボロに貶めていた。結局そのオーナーの店の暖簾をくぐったが、濃密なエビのサルサに舌鼓を打つことができたので、入って正解だと思った。徒歩で階段を登って辿り着く丘の頂上からの眺めは圧巻で、街が一つの生物のように感じられ、身震いをした。

続いて訪れたサンミゲルアジェンデは、一泊しかなかったり、私がお腹を壊していたりしていたために、十分に楽しみ尽くしたとは言えないが、その街並みの綺麗さとグアナファトとの違いの大きさに驚いたことを覚えている。なんでも、アメリカのTravel Leisure誌によって、「世界で一番美しい街」に選ばれたそう。その影響もあってか、アメリカ人と思しき観光客が非常に多く、スペイン語より英語を聞くことの方が多かったかもしれない。そしてその異名は伊達ではなく、ソカロに位置する大聖堂をはじめとするコロニアル建築はもちろん魅力的だが、道端の店に並ぶ品々を見ても、全体的にハイセンスでおしゃれだと感じた。これは、メキシコシティやグアナファトのお土産品がイマイチだったからそう思ったというわけでは決していないことを強調しておく。

メキシコシティは、言わずと知れた大都市で、ラテンアメリカを代表するメトロポリスなのだが、そのラテンアメリカ自体、その名の由来からもわかる通り、ヨーロッパ、特にスペインに植民地支配された過去をもち、世界の中でも「周縁」として扱われてきた。すなわちメキシコシティは、いわば「周縁の中心」という性格を持っている。実際、合計一週間ちょっとの滞在の中でも、いろいろな側面を見てきた。いやむしろ、ひとつの定まった特徴を見出せなかったという方が適切かもしれない。

具体的には、人類学博物館やテオティワカンでアステカ帝国以前の歴史を学び、CEPEの先生の付き添いで行ったツアーでは、植民地期以降の建築を見て回った。近代的なショッピングモールを楽しんだり、コヨアカンのフリーダカーロ美術館を鑑賞したりもした。だが、中でも一番目に焼き付いているのは、

UNAMの学生と街を観光した最終日、官公庁街を歩いたときの光景だ。道を挟んで左側には、役所として使われている高層ビルが建ち並ぶのだが、右側に目をやると、スラムとまではいかないが、赤レンガの低い家々が連なり、貧しい身なりの子供たちが路地で生活しているのだ。日本の丸の内や永田町ではありえない状況に、メキシコの現状を見た気がした。つまり、アメリカをはじめとする外資の流入により経済発展を遂げつつあるが、そこには格差や貧困の問題が残存しているということだ。

こういうわけで、メキシコシティを何か一言で表すことはできないが、ただひとつ言えることは、ここでは、メキシコやラテンアメリカの古今東西が結集し、未来を形成していくということだ。

思い出しがてら、メキシコシティで体験した忘れがたいエピソードを紹介したいと思う。コヨアカンからホテルへ戻るときに乗ったタクシーの運転手の話である。メキシコでは交通規則なんてあってないようなものだが、彼は特にひどかった。息をするようにクラクションを鳴らし、ウィンカーも出さずに車線変更や割り込みを連発する。狭い道も減速せずに飛ばすので、助手席に座った私は、下手なジェットコースターよりも怖い思いをした。彼曰く、唯一知っている日本語が「sake」らしいが、絶対飲酒運転しているだろう！とツッコみたくなり、実際ツッコんだ。この道30年で無事故だと彼は言い張っていたが、死亡事故以外は事故と認識していない可能性があると思う。会計時に「Propina (チップ!)」と叫ぶので、もともと払う気ではいたのだが、怖くなって少し多めに渡すと、ニコニコしながら爆速で闇へ消えていった。彼が無事故(?)のまま引退することを願ってやまない。

はじめに、何も調べずに研修に臨んだと書いたが、これは褒められるべきことではなく、私は自分の怠惰を反省すべきだと思うが、よかったこともあると言いたい。というのは、事前に学んだ知識による色眼鏡で見ることなく、素直に、見て聞いたことを受け止められたと感じているからだ。入念に下調べをした旅行とは、往々にして、ガイドブックに示されている場所を巡り、載っている写真と同じような写真を撮って満足してしまいがちであり、目的地が臨時休業になどとなった日には、今回の旅行は失敗だったと感じてしまうかもしれない。ある程度無計画に、余裕を持って行くことで、ハプニングにも対応でき、それを楽しむことさえできる。言い換えれば、荒いイメージのまま赴いて、現地ですべて高い解像度で物事を見るという姿勢がよいのではないかと。今回の研修ではこれを実践できた。伝統的情緒の残るグアナファト、隣国アメリカからの観光地として人気なサンミゲルアジェンデ、「周縁の中心」としてのメキシコシティ、3都市すべてがある意味でメキシコらしさを持っているが、それは出発前にはわからなかった。タコスとサボテンの2色だったメキシコ像が、段々とクリアになっていく感覚は、新鮮で面白かった。

あえて本文では、現地学生との交流やCEPEの授業のことを詳しく書かなかったが、彼らとの交流や学習はとても実り多く、今後の学習のモチベーションにつながる経験をさせてもらった。今回の研修を計画してくださった先生方や、現地での生活面で支えてくださったアシスタントの西藤さん、研修以前はあまり交流がなかったにもかかわらず仲良くしてくれたスペイン語TLPの同期たち、そして円安で旅費が高つく中、経済的に支えてくれた両親に感謝の意を表したい。

# 現地で体感したメキシコの表と裏

荒木 有志

メキシコ研修に行く前から、メキシコ人に対して陽気で人柄が良いというイメージを持っていた。これはアメリカに住んでいた頃のメキシコ人の友人たちの影響が強い。一番印象に残っているのは小学校の頃サッカーで同じチームになったメキシコ人の子で、彼は練習中に面白いことを言ってチームを盛り上げたり、試合でゴールを決めたときにダンスパフォーマンスをしたりするなど、非常に陽気な性格をしていた。そのため私はメキシコ人には明るい性格の人が多いのだろうと漠然と想像していた。実際にメキシコに行ってみると、想像通り陽気で優しい人が多く、全体として温かい雰囲気の家だと感じた。その一方で、明るいイメージとは対極の差別や格差といった現実も知ることができた。ここではメキシコで感じた魅力と生々しい現実の両面について述べていく。

まずメキシコで見た問題点として治安の悪さが挙げられる。メキシコの中でも観光地などは比較的良好だが、それでも日本よりは悪い。一度メキシコシティの大きめのモールに行った際、ライフルを持った警官が立っていてかなり驚いたと同時に、それだけ厳重な警備が必要なのだと実感した。近くのエスカレーターに乗るときに少し緊張したのを覚えている。また、街中を歩く時はスリに気をつけるように先生に言われていたので、すぐに使える現金を入れる用の財布と全ての現金やカード類が入った財布を分け、後者を常にバッグの底に入れていた。

もう一つメキシコの社会問題として経済格差がある。国立統計地理情報院(INEGI)が2021年に発表した報告書によると、メキシコの国民の6割以上が低所得層に属するという。メキシコに滞在している間至る所で物乞いを目にしたし、車道に入ってきて物を売る人たちをバスから見かけることが多くあった。

さらに人種差別もメキシコの社会問題の一つである。アメリカと違い日本人に対する差別はほとんどなく、むしろ日本人に対して好意的な態度を取るメキシコ人が多いように感じた。しかし、メキシコの先住民に対する差別は未だ存在する。メキシコでは一般的に先住民は非先住民と比べて貧しく教養がないとされており、医療や社会的なサービス、仕事の機会などでの差別が問題になっている。

メキシコにはこうした社会問題があり現地で過ごすことでそれらの一部を実感した。それらは強く印象に残っており、これから改善していく必要があると感じたが、同時にメキシコの魅力的な部分も多く知ることができた。その一つはやはり人柄の良さである。上に書いたように、日本人に対して好意的なメキシコ人が意外と多く、街中を歩いていると知っている日本語で話しかけてくれることが何回かあった。

知らない人でもフレンドリーにコミュニケーションを取ろうとする人が多く、それを実感したエピソードがある。サンミゲルアジェンデに泊まった日の午後、数人でホテルの近くの大きいスポーツ施設のような公園に行った。サッカーをしようと思ったのだが、ボールがなかったので近くでスポーツをしていた中年の集団に話しかけ、その施設で用具の貸し出しがあるかどうか確認しようとした。すると、彼らが行っていたテニスのような何か(名前を覚えてくれたが忘れてしまった)や使っている用具を買った場所についてなどを詳細に説明してくれた。どうやら彼らは、彼らがやっているスポーツに我々が興味を持ったのだと思ったらしい。結局ボールを借りることが可能かどうかはわからなかったが、初対面の人にそこまで熱心に話ができるのが驚きでとても印象に残っている。

その他にも、CEPEの授業では先生が陽気で、授業中にジョークを連発してクラスの雰囲気を明るくしてくれるなど、日本では余り見ることがないタイプの先生で授業が非常に面白い時間だった。最後の日に一緒に行動したUNAMの学生も親切で、同じ工学部の学生だったのでメキシコでの学生生活について詳しく教えてくれた。日本よりも演習の授業が多いことに驚いたが、工学部に女子が少ないのは同じで共通点もあった。私の頼りない語学力でも会話が続くように積極的に話しかけてくれて、楽しい時間を過ごすことができた。

メキシコでの二週間という期間はあっという間に過ぎ、短く感じたが終わってから思い返してみると多くの出来事が詰まっていて、非常に濃い経験をする事ができたと思う。私は工学部に進学するのでメキシコで見た社会問題と将来的に関わりを持つかはわからないが、専攻に関わらずメキシコやラテンアメリカについてさらに理解したいという気持ちになった。また、せっかく学んだスペイン語をこれからも学習し続け今回の研修で出会った人たちとの繋がりを大切にしていきたいと思う。



# メキシコにおける格差と La Economía Popular

板橋 一真

今回の訪問では、安全上の観点からグレードの高いホテルに泊まり、かなりの値が張るレストランで食事をするのも多々あった。そのため、円安も手伝って出費は日本で同じようなことをするものと遜色がないレベルとなっていた。一方で、CoyoacánやGuanajuatoでのマーケットでは、日本では確実に数千円はくだらないであろう素晴らしい商品が数百円という破格で売られていることも多々あった。また、CEPEへの道中、高い塀で囲まれた現代的なデザインの邸宅が並ぶ地区を通ったと思えば、明らかに人が住んでいるにも関わらず、状態がよくない集合住宅も見られた。街を歩いていても、銀座やロサンゼルスを中心にも負けず劣らずの華やかな商業施設があると思えば、一步入れば身の危険を感じるような暗い雰囲気のプロックが隣接している。このように、2週間という短い研修期間、メキシコ・シティという1都市においても、東京では感じられないほど大きな差を感じることができた。この感覚は数値によっても裏付けられる。世界銀行の2021年の統計によれば、メキシコのGDPは1.29兆ドルであり、カナダやオーストラリアに匹敵する額であるにも関わらず、The Economistによる2022年の両国のビッグマック指数は、アメリカドルを基準として26%超の差が開いている（メキシコが-16%、カナダが+10.6%）。このように、メキシコのGDPは物価（特に、一般市民の実生活における経済活動）から大きく乖離しており、激しい格差が存在していることが示唆される。加えて、格差の指標であるジニ係数は世界銀行の2020年の数値で45.4と、GDPがおよそ10倍のアメリカ合衆国に比肩する数値となっている。ここからもメキシコの格差がいかに大きく、そして悲惨なものであるかが読み取れるだろう。

このような状況に加え、政府の管理能力の欠如が重なれば、Alba教授が講演なさったように国の管理から外れた経済活動が興り、それが「公式な」経済活動に深くかかわりをもつのも当然のことであるように思える。私がLa Economía Popularの今後について質問した際、教授は消えることがないにしてもその割合はだんだんと減ってほしいという旨の

回答をなさっていた。しかし、私はLa Economía Popularの割合が減ることは現状では難しいのではないかと考える。

一つの理由は、グローバル化による海外資本の介入である。Alba教授が示していたように、いまやインフォーマルな経済圏は国内にとどまるものでなくなっている。例えば、彼らが売る品物は中国から買ったものになっているし、売り先も国内だけでなく陸続きの米国にまで広がっている。また、メキシコの場合、インフォーマルな経済圏が観光資源としてフォーマルな経済圏に組み込まれつつあるのではないかと考える。マーケット一つをとっても、警察官が見回り、クレジットカードが使える（決済が追跡されても問題がない証左であると考えられる）「きちんとした」ものもあれば、個人のテントが所狭しと並び、メキシコペソまたはアメリカドルしか受け入れられないというような政府の管理外にあってもおかしくないようなマーケットもある。しかしこれらはともに観光資源となり、海外からの旅行者の消費の場所となっている。すなわち、インフォーマル経済はフォーマルな経済と深いかかわりを持ってしまっており、ただ政府がそっぽを向いているだけのような状態になってしまっているのではないか。結局、グローバルな商品移動の流れに組み込まれているからこそ、この状態が改善へと向かうことは非常に難しいと考えられる。

第二に、Web3.0と称されるような技術の確立がある。暗号通貨やTorのような、分散的なシステム構築が可能となる技術によって、取引そのものを匿名的に行うことが可能となった。現に深層webにおいては、通常のマーケットでは足がつかない取引不可能であろう武器や麻薬も簡単に購入を試みることができる。必ずしもインフォーマル経済が違法性を帯びたものではないにしろ、政府の監督下を超えた経済活動へのハードルは技術の進歩・機器の価格下落によって低くなっていることは事実だろう。その匿名性ゆえ具体的にどの程度の経済活動が行われているかは想像の域を超えないものの、例えば過去に摘発されたあるサイトでは、管理者は62万4000ビットコイン（サイトが閉鎖された2013年当時で1.5億ドル超の価値）もの大金を稼いだといわれている。これらの取引はそもそも高い匿名性を誇り、また捜査に膨大な労力がかかるため、ただでさえ行政が機能していない国にとっては実態を把握し、それをコントロールすることは不可能に近いといえよう。これらの技術により、インフォーマル経済はデジタルな世界にも浸透し、またそれを縮小しようとする試みは非常に難しいものとなっているのである。

以上のように、現代のインフォーマル経済はグローバル化・デジタル化という二つの大きな潮流に乗って一国の力では簡単に対処できないものとなっている。そのため、インフォーマル経済、そしてそれに付随する問題を解決するには、多国間の協力を仰いであうえて、新たなアプローチが必要になってしまっているのである。

参考

世界銀行 (<https://data.worldbank.org/>)

The Economist (<https://www.economist.com/big-mac-index>)

The Guardian (<https://www.theguardian.com/technology/2020/nov/04/silk-road-bitcoins-worth-1bn-change-hands-after-seven-years>)



# メキシコの貧困と格差

木戸 彩華

メキシコでの2週間はとても楽しく、新鮮なものであった。町並みも人々も、日本やこれまで訪問した国とは全く異なっていて、ワクワクしたのをよく覚えている。カラフルな旗や国旗で彩られた街は、メキシコの陽気な雰囲気によく合っていて、『リメンバー・ミー』の世界に入り込んだようで感動した。しかし、その素敵な街並みと同じくらい印象に残っているのは路上で生計を立てる人々の多さである。露店でタコス売る人、楽器を演奏して物乞いをする人、さらには車道で物を売ったりパフォーマンスをしたりする人。中には子供もいたりして、いわゆるインフォーマルセクターでの労働に従事する人が多く見かけられた。メキシコは発展途上国であるという話は研修前から聞いていたがこれほど多くの人々が貧困状態にあることは驚きであった。さらに驚いたことは経済格差の大きさである。CEPEに行く道中では高級住宅街を通ったが庭付きの大豪邸もあり、はっきりとした所得格差を感じるようになった。このエッセイではメキシコの貧困と格差について見聞きしたこと、考えたことを述べていく。

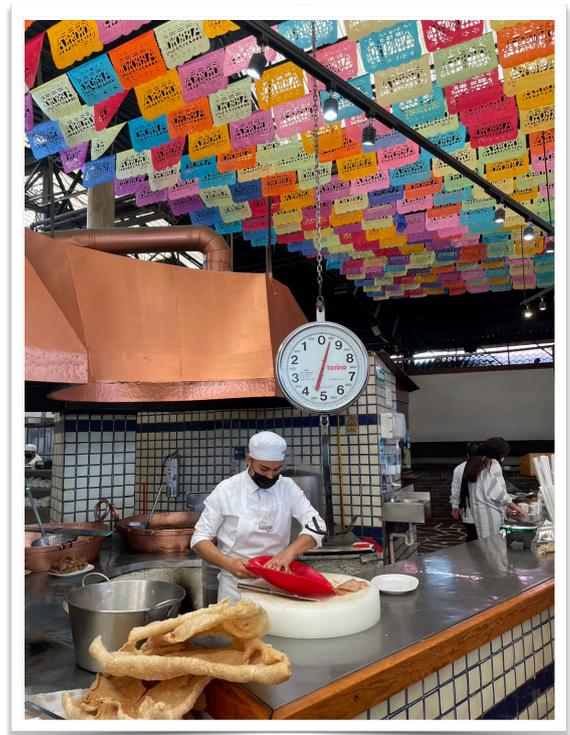
まず子供の貧困についての話として印象に残っているのはストリートチルドレンを支援するNGO、EdnicaのBertha Bocanegraさんのお話である。Ednicaでは“La calle no es lugar para vivir ni para trabajar (道は住むための場所でもなければ、働くための場所でもない)”というスローガンのもと路上で働く子供達とその家族の人権を守るための活動を行っている。Bocanegraさんによるとストリートチルドレンの多くは性被害や暴力のために路上での生活を余儀なくされており、近年ではその数は減っているとのことであった。しかしながら数が減っているのは状況が改善されているからというわけではなく、麻薬などの犯罪集団に子供達が利用されているからだと推測しているとBocanegraさんはおっしゃっていた。確かにメキシコ滞在中に路上で生活したり働いたりする子供をあまり見かけなかったが、このような悲しい現実が背景にあるとは思いつかなかった。ストリートチルドレンとなった子供を支援することももちろん大切なことではあるが、子供たちがストリートチルドレンになる前に対策をすること、つまり貧困の連鎖を断ち切ることが重要であると強く感じた。

またUNAMでもメキシコの所得格差について考える機会があった。メキシコの社会問題を考える授業において先生が特に強調していた問題は貧困と所得格差であった。では所得格差をどのようになくすかという問いかけに私たちが出した答えは高所得者の税金を増やし、低所得者の支援をするというものであったが、先生は汚職や横領によりそのお金がうまく使われていないということも教えてくれた。これもまたメ

キシコの悲しい現実であり、所得格差が他の社会問題と複雑に絡まり合ったものであるために解決は一筋縄にはいかないことを思い知った。

それではメキシコの貧困や所得格差の問題に我々はどう立ち向かうべきなのか。まず考えられるのはEdnicaなどのNGOへの支援とボランティア活動への参加である。Ednicaではボランティアを募集しており、実際に東大の学生も数人ボランティア活動に参加したことがあるという話を聞いた。また、遠いメキシコの現状について日本の人々に少しでも興味を持ってもらうために、現地での様子を発信することも大事であると感じた。私たちがメキシコの貧困や所得格差の解決のためにできることはあまりなく、微力であるかもしれないがまずは問題に興味を持ち気に掛ける姿勢を持っていきたい。

メキシコでの二週間は驚きと新たな発見の連続であった。実際に現地に行かないとわからなかったことや、メキシコ人との会話で理解が深まったことなどはたくさんあり、非常に有意義な研修となった。また、スペイン語学習の面でもこれまで前期教養課程で学んだものを応用したり、新しく学んだりできたことがあり言語を学ぶ楽しさを改めて感じる事ができた。今回の研修で感じた様々な事柄を大切にしつつも、これからも自分の視野を広げられるよう、チャレンジしていきたい。



# ¡Viva México!

## 飯沼 誠人

今回のTLP研修は、さまざまな点で、私にとってかけがえない人生経験となったと確信している。今回の報告書ではその中でも特に言語能力の向上と言う観点から説明していきたい。

私は少なくとも渡航前においては、いくらメキシコがスペイン語圏とはいえ、アメリカ合衆国の隣国だし、もしスペイン語が通じなかったら、最悪英語を使ったら乗り切れるだろう、と高を括っていたところがあった。

しかし、実際には全くそんなことはなかった。最悪英語は使えるだろうと言う保険は、メキシコ現地での生活においては機能しなかったと言っても過言ではない。例えば、メキシコ研修前半のメキシコシティで宿泊していたホテルの近くのスーパーで、買い物をしていた時のことである。そのスーパーは、wallmartの系列店であったため、何の疑いもなく、英語が使えるだろうと思い、会計レジにて、不要になった商品を「棚に戻しておいてください」と言う趣旨の発言を英語でしたところ、全く聞く耳を持たれず、店員を困らせてしまったことがあった。その際に、インターネットですぐに調べて、片言でもいいから、とにかく伝えなければならぬと意識し、「¿Puedes devolver esto?」と発言したところ、店員はすぐに理解し、その商品を返品してくれた。

まだメキシコに到着して日も浅かったこの時、この経験ができたことは些細なことかもしれないが、メキシコにおける、私のスペイン語を話すことに対する意識を変えた出来事と言って良いだろう。この出来事があったからこそ、私は、特段臆することもなく、スペイン語でのコミュニケーションをすることができたのである。

こうして、スペイン語に対する自信をつけることができた私は、前半のCEPEと言うスペイン語の語学学校においても現地の留学生との会話を楽しんだり、道端でたまたま声をかけられたメキシコ人と会話したり、と言ったことを積極的にすることができた。このことにより、段々とスペイン語に慣れることのできた私は、ある程度「自然」な会話がようやくできるようになった。

日本国内で、スペイン語を学習していたときは、どうしても伝えると言う意識よりも、活用や時制を間違えないと言うことばかりを意識し過ぎて、話している時にも「えー」「あー」などのフィラーを多く挟む、あまり「自然」ではない会話姿勢であった。

しかしメキシコに渡航してからは、フィラーを完全に無くして話すことはできなかったものの、意識し過ぎなくても、いつの間にか活用や時制を考慮して話すと言う「自然」な話し方を手に入れることができるようになっていた。

また話し方という点だけではなく、語彙力も格段に伸ばすことができた。語彙力をつける際に肝要なことは、単語を一つのイメージとして理解すること、そしてそれを実際に運用することだと考えているが、実際にその言語を使っている国に渡航すると言うことは、この両者をいずれも同時にできる環境を生み出してくれた。

例えば、ナイフ、スプーン、フォークは、それぞれスペイン語では、cuchillo、cuchara、tenedorであるが、ナイフという「実体」を見て、これがcuchilloであると意識をした上で、実際にナイフを使い、さらにナイフをくれるよう店員に求めると言うような経験は、少なくとも日本においては中々することのできない経験であろう。ましてや、cuchilloとcucharaなど、発音の類似している両者を日本において座学で勉強したところで確実にすぐ忘れてしまう。

外国語を日本語に変換して理解すると言うのは確かに最もやりやすい言語の学習方法であるが、それだけでは必ず限界がある。今回の例でいえば、単語のイメージは「実体」であったためによりわかりやすかったが、このようなことは他の抽象的な単語においても実践することができる。インターネット回線にも限りがあり、わからなかった単語をすぐに日本語でどう言う意味なのかを調べる余裕もなかったため、自分で単語をイメージで掴みとる意識をしなくても、わからなかった単語をその場で、会話をしているスペイン語話者に尋ねながら、イメージで解釈していくという訓練が幾度となく必要であった。

もちろん会話においては、日本語以上に神経を使うことは言うまでもなかったが、貴重な経験であったとともに、スペイン語を使っているうちに、段々と語彙力が増えていく感覚を実感することができたと言う点で、とてもやりがいがあった。

このようにスペイン語の語学能力が上がっていく中で、スペイン語をツールとして、異なる文化、異なる価値観を持つような人たちとコミュニケーションを重ねることができた。メキシコと言う日本からはるか遠くにある場所で、スペイン語を操ることさえできれば、相手に自分自身や日本について紹介し、逆に相手自信や、相手の文化についての理解を共有することができる。こうした経験がいわば半強制的に、望めばいくらでも得ることができ環境に大学生のこの時期に身を置けたことは、冒頭にも述べた通りかけがえない財産となった。また、一緒に渡航し、仲を深めることのできたスペイン語TLPのメンバー、また西藤さん、受田教授、そしてこの研修に関わっていただいたすべての方々にこの場を借りて感謝申し上げたい。



## 田中 梨咲子

TLPメキシコ研修は自分にとって、初めてスペイン語圏の国に滞在し、スペイン語を実践的に使う経験だった。メキシコの空港に着いた時にはアナウンスの速さに驚いてしまったが、日を追うごとにスペイン語を聞いたり話したりすることに慣れ、抵抗なく使うことができるようになった。また、スペイン語を通してメキシコの歴史、文化、現在の社会状況について知ることもできた。一方、CEPEの先生やガイドの方の話で完全に理解できない部分も多くあり、知識・能力の不足も実感した。今後さらにスペイン語を学習し、スペイン語圏の文化についても学習したいと思った。

TLPメキシコ研修に参加して最も印象に残ったのはCEPEでの授業、Alba教授・Bocanegraさんの講演、UNAMの学生との交流である。

まず、CEPEでの授業は特にCulturaの授業が印象に残っている。メキシコの近現代の政治と芸術についての講義だった。メキシコの芸術は、独立直後は上流階級向けにヨーロッパの様式を模倣した作品を作っていたが、徐々に一般大衆のアイデンティティーを取り入れるようになったと知った。その時、先住民とヨーロッパの世界が人種的にも文化的にも混ざり合っていたことが特徴的だと思った。また、アメリカの政策によりメキシコ映画が黄金時代を迎えたり、メキシコ革命のイデオロギーを、読み書きができない民衆に伝えるために政府が援助して壁画運動が始まったりしたように、政治と文化が強く影響し合っていたことに驚いた。この授業で扱われた建造物や壁画を実際に見学することもでき、スペイン語の学習を通じて新しく文化も学べて嬉しかった。一方、講義では完全には理解できない部分も多かった。特に、時代背景などの知識がなく、使用される語彙に馴染みがなかったため、聞き取りが難しかったと感じた。メキシコの歴史・文化についての知識やスペイン語の能力をより上達させたいと思った。

次に、Alba教授・Bocanegraさんの講演では、現在のメキシコ社会に存在する格差を意識させられた。Alba教授は露店などの“La Economía Popular”、Bocanegraさんは道で働いたり暮らしたりしている子供たちについて話して下さった。実際、メキシコ滞在中、タコスやお菓子を売る露店、信号待ちの車の間を歩いて物売る子供、道端で物乞いをする障がい者などを頻繁に目にした。特に、露店は至るところにあり、タコスやマンゴーなど、とても美味しそうだったが、お腹を壊す恐れがあるため私たちは避けるようにとされていた。また、車の間を商品を持って歩く人や、物乞いの方などに対しては、なんとなく関わらないようにしていた。しかし、これらがメキシコに存在する格差の表れだと知ると、ただ遠巻きに見ているだけではいけないという気持ちが湧いた。お二



人の講演の中で、メキシコには職や貧困層への教育支援が十分でないが、政府には現状を改善する力が十分でないこと、メキシコの中・上流層は道で働く子についてはその親に問題があるからだと考えがちだということの二点が特に印象的だった。さらに、さまざまな困難に直面しながらも問題解決のためにNGOとして活動されているBocanegraさんの“disigualdad no debe existir”という言葉は深く心にささった。日本からでも支援できる方法を考えたいと思うとともに、程度や形の違いはあれ世界中に存在する格差から目を背けないようにしたいと思った。

最後に、今回の研修で最も感動的だったのが協定校の学生との交流である。UNAMでの交流会ではスペイン語でプレゼンテーションをする機会を得られた。予想以上に多くの日本語を学習しているUNAM生が集まっており緊張したが、頑きながら聞いてくれたり終わった後にスペイン語が上手だと言ってくれたりして、これまでの学習の成果が発揮できたのではないかと思った。さらに、UNAMで知り合った学生とSNSで連絡を取り合い、最終日に1日一緒にメキシコシティを観光することができた。初めは、知り合って間もないのに、急に誘っても来てくれるのだろうかと不安に思っていたが、快く引き受けてくれ、メキシコの人々の優しさを深く感じた。メキシコシティを歩きながら主要な建造物について教えてくれたり、お互いの趣味や大学生活について話したりできた。研修参加前にはスペイン語だけでコミュニケーションをとって1日過ごすことなど想像できなかったが、8人のUNAM生とスペイン語と日本語を交ぜながらコミュニケーションを取り、1日を過ごすことができ、スペイン語を使って新しく人と知り合うことができたことに感動した。ここの出会いを大切に、これからも連絡を取り合っていきたい。

今回の研修では、TLPでスペイン語を学習してこなければできなかった多くの経験と学びを得ることができた。新型コロナウイルス感染症の流行のため様々な困難がある中、この研修を実現して下さった先生方に感謝申しあげたい。そして、今後もスペイン語の学習を続け、さらに多くの人と知り合い、スペイン語圏の文化を知りたいと思う。

## 細野 希美

今回のメキシコ研修は、私にとって初めてのメキシコで、久しぶりの海外でした。よく海外は日本と比べて治安が悪く、衛生的にもあまり良くないということを聞きますが、メキシコに到着して3日目にして、私は早速海外の洗礼を受けました。

メキシコ研修の最初の1週間は、現地の大学の留学生用のCEPEの授業を朝から受けるため、朝ごはんは前日にホテルの近くのスーパーで買ったパンなどで済ませていました。その日は独立記念の季節限定のpan de muertoという甘いパンともう一つ普通のパンを食べていたのですが、思っていたよりかなり重い朝ごはんになってしまい、胃もたれした状態で授業に向かいました。メキシコによくあるスピードランプがたくさんある道路を通る送迎バスによって、無事バス酔いした状態で授業にのぞみました。ところがただのバス酔いだと思っていた胃もたれに寒気と吐き気が加わり、その日の午後は人類学博物館を訪れる予定でしたが、ホテルで待機させてもらうことになりました。

ホテルに帰って少し微熱があることがわかり、とりあえず寝ることにしたのですが、調べてみると完全に食中毒の症状でした。そこで今まで自分が食べたものを振り返ってみたところ、非常に思い当たる節があるものを前日の夜に食べていました。ラズベリーです(ちなみにスペイン語ではframbuesaと言います)。メキシコはフルーツが豊富でパイナップルやマンゴーなど非常に甘くて美味しいフルーツが安価に手に入ることので、スーパーでせっかくだからと1パックのラズベリーを夜ご飯のついでに買っていました。ここでしっかり水道水ではなくミネラルウォーターを使って洗ってから食べていたらよかったものを、日本という安全な国で育ってしまった私はなぜかスーパーを信じて全く洗わずにラズベリーを食べ始めました。さらに、泊まっていたホテルには冷蔵庫がなく(メキシコ滞在中に泊まったホテルは全て部屋に冷蔵庫も電気ポットもなく結構不便でした)、保存がきかないと判断した私はその日のうちに1パックを全て食べ切りました。ラズベリーの何の細菌が当たったのかはさっぱりわかりませんが、ラズベリーで当たったことは確実でした。まさか自分が食中毒になるなんて夢にも思っていなかったのが、恥ずかしいことに胃薬などを何一つ持ってきていませんでした。急遽西藤さんに胃腸薬をいただき、寝て治すことにしました。夕方まで寝ていたのですが、食中毒って怖いんですね、何も喉を通らなくなります。お昼ご飯すら食べていなかったのに1ミリもお腹が空いていませんでした。ただ何か食べないといけないと思い、西藤さんが買ってきて下さった小さいバナナを一本頑張って食べました。次の日も全く食欲がなく、3食バナナという生活を送りました。次の日には下痢が来てし

まったため、結果的には食中毒で2日間ダウンしてしまったということです。

今回の食中毒で学んだことは、自分にとっての当たり前が他の環境に行くときと全く通用しないということと、慣れない環境、特に海外に行く時は、様々な可能性を想定して、胃腸薬や酔い止めなどの薬の他、消毒スプレーや除菌シートなどを絶対に持っていかなければならないことでたてでした。今後しっかりと頭に入れておきたいです。

ここではまだメキシコで起きた事件について話したけになってしまったのですが、研修を通して自分の国の文化についての知識を持つことが非常に大切であることを痛感しました。

特にそれを感じたのは9月16日のメキシコの独立記念日であり、私たちのメキシコ滞在の最終日でもありました。私は木戸さんと一緒に、UNAMで日本語を勉強しているAlanという男子学生にメキシコシティの中心部を案内してもらいました。独立記念のパレードで人が溢れかえり、銃を持った軍の人たちがたくさんいる様子は日本ではなかなか見られない光景でした。Chapultepecという歴史深い公園に連れて行ってもらったのですが、そこがいくつかの戦争を経験しており、特にアメリカとの戦争の時には士官候補生が戦いの中でメキシコのために城から身を投げて自殺した、という伝説が残っていました。Alanはこれらの歴史について、当たり前のように私たちにお話ししてくれました。それらはとても興味深く、もっとメキシコシティの色々な場所をめぐるみたい、と思えるような時間でした。とても手厚い案内をAlanにはしてもらったのですが、もし自分が日本を案内することになった際に、そもそも自分の身近に歴史深い場所がそこまでたくさんないというもありますが、あまりにも自分の国についての歴史や文化を他の人に説明できるほどの知識を持っていないな、と感じました。これをきっかけに、もう少し自国文化についての教養を深めたいと思いました。

ここまでざっくりメキシコ研修に参加して感じたことをつらつらと書きましたが、上記の事以外にも多くのことを感じ、体験することができた2週間でした。また、自分の経験したことだけでなく、TLPの仲間に出会えたことが宝物の一つになったと思います。この2週間はとても短い時間でしたが、一つでも多くのことを覚えておきたいと思いました。



# 異国の「ことば」と「コミュニケーション」

中村 咲喜花

想像以上にメキシコでは英語が通じない。そう悟ったのは San Miguel Allende のマーケットで英語しか話すことができない観光客と、スペイン語しか話すことができない店員の通訳を頼まれたときである。道を歩いていると、”¿Sabes inglés? Díjala ‘La farmacia está fuera.’ a esta señora por favor”と突然声を掛けられ、自分に投げかけられた質問だと理解するのに少し時間がかかった。

どうやら私は、少なくとも観光地では世界中どこに行っても必要最低限の英語が通じるだろうと勝手に期待してしまっていたようだ。だからこそ、今回の研修でも「スペイン語でうまく言えなかったら、英語を話せばいいだろう」と甘く構えていた。しかし、現地では、話しかけられる言葉はほとんどスペイン語、街中の表示もかなりの頻度でスペイン語のみ、UNAMの学生も英語はそこまで話さないということが多く、最初は戸惑いを感じた。中でも、冒頭のマーケットでの一件は自分の中でかなり印象的なメキシコのエピソードとなった。

それでも、私がメキシコでコミュニケーションに苦しむことはなかった。TLPで鍛えていただいたとはいえ、私のスペイン語学習歴は1年と半年。何とか日常会話が最低限送れるレベルである。そんな改善の余地が大きい語学運用能力でも現地の方との交流を楽しむことができたのは、彼らが私のスペイン語をゆったりとにこやかに受け止めてくれたことが大きい。上手くリスニングができなければ何度でも繰り返してくれる、活用や単語が減茶苦茶でもなんとか理解しようと一緒に試行錯誤してくれる、単語が出てこなくて悩んでいても焦らせたり会話を打ち切ったりせずに待っていてくれる…。最初は上手に話そうと肩に力が入っていた私でも、リラックスしてコミュニケーションを取れるような雰囲気を作ってくれていた。どうしたらそのような心地よい場をつくりだすことができるのか、帰国後に少しだけ考えてみた。

一つには、話し手を急かさないメキシコでのゆったりとした時間間隔があると考えている。メキシコの時間の流れは日本よりも緩やかで、約束の時間が遅れることも日常茶飯事と聞く。実際に時間通りに来ない相手に驚くこともあったが、「未来」の計画を回すために「今」をおろそかにする、例えば次の予定に間に合わせるために相手との会話を切り上げてしまうような自分に比べ、メキシコ人はむしろ相手との「今」を大切にしているのではないかと感じた。だからこそ、外国人の慣れないスペイン語にもゆったりと耳を傾けてくれる余裕があったのかもしれない。



彼らのフレンドリーさに救われた部分も大きい。CEPEで昼食をとっていた人に突然話しかけたときも、語学学校の時に毎日通っていたパン屋の店員さんと世間話をしたときも、バス停で待っていた小さな女の子とおしゃべりしたときも、顔と体をこちらに向け、にこやかに対応してくれた。雨天時は、傘をさして帰らずに、雨が止むまで近くのカフェで新しく友達を作るという話もあるほど、メキシコの方は初対面の人と仲良くなることを歓迎する文化があるようだ。相手と仲良くなろうという意欲があったことが、場の雰囲気心地よいものにしていただように思う。

異国の人々と接する中で、スペイン語や英語といった語学の運用能力が大切なのは言うまでもない。今回のメキシコ研修ではCEPEの授業や現地の方々との会話から、前よりも格段にスペイン語が上手になった。しかし、この研修では語学としてのスペイン語だけではなく、むしろ「コミュニケーション」そのものについて学ぶところも大きかったと感じている。日本と比べて人と人の距離が近いと言われるメキシコ。その全く異なるコミュニケーションの取り方に触れたことは私の今後の生活や心構えに大きな影響を与えそうだ。

最後に、Coyoacánの書店で出会った貧しい女性について少し触れたい。Gandhiという地元では名のある本屋を覗いたとき、突然日本人であるのかと英語で訊ねてきた女性がいた。何冊もの本を積み、椅子でくつろいでいたから、てっきり店員かと思いついて話しているうちに、彼女が実は店員ではなく、その書店に通い詰めている近所の住人であること、書店の売り物の本で英語を自学している最中であることを知った。今まで自分が体験した語学学習とは質的に異なる意欲や考え方に触れることができ、とても刺激になったことを今でも覚えている。

今回のメキシコ研修を通して、「語学を学ぶ」、ひいては「コミュニケーションを図る」とはどういうことなのか、改めて考えてみることができそうだ。人や場所が変われば意思疎通の図り方も変わる。これからも考えを深めていきたい。

## 3個目の言語の習得

佐野 綾

夏休みは結局あまりスペイン語の勉強をしなかった。メキシコに行くのはもちろん楽しみだったし、自分は勉強しておかないと到底現地のスペイン語についていけないことも承知していた。しかし他にイベントが多く、考えることが山積していたため余裕がなかった。ただの言い訳だが。

案の定、メキシコに着いた時空港のアナウンスは全く聞き取れなかった。飛行機の中のアナウンスは、日本語、英語に続いてスペイン語が流れたので意味がわかる場所もあったが、メキシコ人がメキシコ人のために話すスペイン語は私にとって、意味をなさない異国語だった。あれ、二週間大丈夫かなと思った。

翌日からCEPEに通い始めた。1時間目の文法の先生のスペイン語はとて聞き取りやすく、こちらのレスポンスもしっかり聞き取って下さったので安心した。説明もわかりやすかった。満足して2時間目の文化の授業を迎えたのだが、今度は打ちのめされた。先生のスペイン語がほとんど文章として耳に入っただけだった。1時間目の先生のスペイン語は外国人向けに配慮された話し方だったのだと知った。内容も人名や固有名詞が多く、ストーリーを掴むのが困難で、必死に聞き取った単語をノートに書いているうちに疲弊してしまった。先生が技巧的だという詩の解説を始めたところで脳が力尽き、ノートに「ねむい!」と書いてその日は終わった。授業後に皆と難しかったねと言いつつは楽しかったが、皆私が聞き取れたようなことは最低限理解していて、TLPのレベルの高さを実感した。

翌日の文化の授業では昨日より聞き取れると感じた。ノートもスペイン語と日本語を混ぜて綺麗に書けるようになっていた。一日でこんなに成長するのかと嬉しくなったが、授業後に、隣の子が今日の授業は100%理解できたらしいということを知り、こんなところで満足してはいけないのだと思った。そして文化の授業に全エネルギーを注いだせいで、授業後訪れた博物館でのガイドは聞き取ろうという気力すら残っていなかった。博物館は大好きなのに、悔しい。

CEPEの授業3,4日目の文化の授業では、政治の話はかなり理解できていると感じた。文化の話は理解できなくてもいいと思えるようになった。自分としては「わからないところがわかる」というのはかなり聞き取れるようになった証拠だと思っているので安心した。この二日間は授業後にCOLMEXとUNAMの学生との交流会があった。私はイギリス居住時の経験から、若者の話す言葉はたいい速くて砕けていて分かりづらいと思っていたのでとても不安だったが、私が聞き返すと学生はゆっくり話してくれた。緊張していつも以上にスペイン語が出てこない私の発言も辛抱強く聞いてくれた。話した内容は「好きなメキシコ料理」や「いつか日本に行きたい」といった、言ってしまうとありきたりなものだったが、とにかく同年代のスペイン語話者とコミュニケーションが取れたことに満足した。

CEPEの授業最終日には時差ボケも治り、ようやく眠くなることなく集中して授業を聞くことができた。授業後にはコヨアカンに行き、初めて自由行動の時間をもらった。皆スペイン語

で買い物できてとても嬉しそうだった。私も市場で買い物をしたが値切るのはなかなか勇気が出なくて、服を値切って買った友達を素直に尊敬した。スペイン語力の差というよりはコミュニケーション能力の問題だと思った。また、TLP生は英語が得意な人が多く、私が英語で思い浮かんだことを言っても反応してくれるのが楽しかった。普段周りに帰国子女があまりいないので、英語でも日本語でもスペイン語でも会話できてしまうこの仲間は本当に貴重だ。

メキシコ6日目はCEPEのあの文化の先生がガイドをしてくださってCDMXの中心部を巡った。壁画運動を率いた巨匠たちの壁画がたくさん飾ってある建物が気に入った。壁画に迫力があり面白かったというのもあるし、先生の壁画の解説がほぼ完全に聞き取れて嬉しかったからでもある。もう博物館に行った時の私とは違うぞと思った。先生のスペイン語の速さがネイティブとして標準的だと聞いて、なんだ、もう私スペイン語で生きていけるじゃないかとまで思った。しかしその夜行ったハンバーガー屋さんでは店員の言っていることが分からず、まだまだだと思い直した。

7日目はまた市場に行き、初めて一人でぶらぶらした。服屋さんでは店員さんに色々な服を見せてもらい、試着もした。結局買わなかったが、なんの助けもない状態で、一人で会話を成立させられたことに大きな喜びを感じた。実用的なコミュニケーションが楽しくてもっと色々な店員さんと会話してみたいと思った。

一週間目はこのように過ごし、二週間のメキシコ滞在を終えた時にはスペイン語を聞き取る力に对しかなり自信をつけることができた。自分が話すことに関しては再度動詞の活用を叩き込まないとダメだと感じたが、メキシコの人には私が話し終わるのを待ってくれるのでなんとかやっていけるとも思った。新しい言葉が使えるようになることはこれほど楽しかったのかと驚くほど、自分の成長にワクワクしたし、周囲とコミュニケーションを取るたびに胸が躍った。

そして何より一緒に成長してくれるTLPの仲間がいたのが心強く、皆でトライリンガルを目指して嬉しかった。私は優秀な仲間にも囲まれ周りに憧れながら勉強するのが大好きで、だから東大にもTLPに入りたかったのだが、TLPは第二外国語習得のモチベーションを維持するのに最高の環境だったと改めて思う。二週間集中的にスペイン語に浸る中で触れた皆の優しさと努力と真面目さには感謝してもしきれない。研修を無事終えてもうスペイン語はいいやと言うメンバーもいたが、私はもっと言語習得の喜びを味わいたいからもう少し学び続けようと思う。将来の仕事のためでもなんでもなく自分の楽しみと喜びのために学んで、いつか自信を持って私はトライリンガルですと言えるようになりたい。



# メキシコ流行語大賞

篠原 優輝

9月4日。夏休みも折り返し地点に入った頃。私は人生で初めて成田空港に向かった。本当に行けるのかメキシコに、と心が少し浮き足立つ、一方で、文系のTLP生とは授業を通して関わりがあったが、理系のTLP生とは全くの初対面の中で始まるメキシコ研修ということもあり、うまくいくのだろうかという一抹の不安も感じながらの出発であった。

10月10日。Aセメスターの授業が始まった今。思い返してみるとそんな不安まったくと言って良いほど問題ではなかったくらいに私の人生の中でとても思い出深いメキシコ研修になったように感じている。

今回のメキシコ研修はTLPという東京大学の言語プログラムの一環として行われたものであり、TLP生にとってはずっと駒場で座学として学んできたスペイン語を活用する「集大成」としてのメキシコ研修であった。そういう意味で私はこの活動報告書におけるエッセイを「言葉」というものに注目し、タイトルを「メキシコ流行語大賞」と題して書いてみたいと思う。

ノミネートNo.1「más o menos」。時間を逆行した14時間のフライトを終え、メキシコに到着したその翌日、私たちは現地のCEPEという語学学校に入り、午前9時から午前11時まではEstefany先生による文法の授業、午前11時半から午後1時半まではPablo先生によるメキシコ文化の授業をスペイン語で5日間受けることになった。その高校生の時間感覚を取り戻すかのような授業の中で、Estefany先生が紹介してくれたのが、この「más o menos」という言葉である。どんな言語を学ぶ時にも教科書の最初にほぼ必ずと言って良いほど出てくる「調子を問う」表現に関する言葉であり、スペイン語においては「¿Qué tal estás?」や「¿Cómo estás?」という問いかけに対して、脳死で「Muy bien」と答えるのが常套手段となっているかと思うが、Estefany先生が紹介してくれたのがこの「más o menos (まあまあ)」である。この言葉の素晴らしいところは日本人に特徴的である曖昧さを絶妙に表現していることであり、さらにこの「más o menos」と口にする際のパチンコを打つかのように手を右回り左回りに回す絶妙なジェスチャーが拍車をかけて、このメキシコ研修において困った際には「más o menos」と言うことで事なきを得ることが主流となった。

ノミネートNo.2「Venganza」。正式名称としては「La venganza de Moctezuma (モクテスマの復讐)」であり、日本語訳を聞いただけでは世界史に出てくる単語かなと思ってしまいが、実のところは「腹痛」である。SセメスターのTLPの授業の中でメキシコ研修の概要を受田先生が説明して下さった際に、初めて出てきた言葉であり、「単なる腹痛」ではなく「メキシコを訪れた旅行者が起こす腹痛」を表したものである。話を聞いただけではへえ～と言うほどにしか気に留めなかったが、実際メキシコを訪れるとやはり固有名詞として存在するだけあって影響力の大きなものなのだと思えることになった。CEPEの授業を受け始めて数日、1日ごとに異なる人が続々と腹痛、つまりは「Venganza」を訴えて、かくいう私自身もメキシコに到着して1週間ほどした頃に「Venganza」になってしま

い、さらにその日がメキシコシティからグアナフアトへと5時間ほどかけて移動する日にぶち当たってしまい、とにかく苦しかった記憶がある。日本から念の為持ってきた「正露丸」のおかげで事なきを得たが、メキシコに行く際は気をつけてほしい。

ノミネートNo.3「Bienvenidos」。正式な文章としては「受田です。Bienvenidos」であり、メキシコに先に到着されていた受田先生がTLPメキシコのLINEに参加されて、メキシコに遅れて到着した私たちに対しておっしゃった第一声がこの文章である。この短い文章の中に現れる確固とした面白さに魅了された私たちTLP生は、その後のメキシコ研修の中で時々現れる受田先生を見かけては「Bienvenidos (ようこそ)」と心の中でつぶやくこととなった。しかしこの「Bienvenidos」、日本に帰ってきた際に予期せず会うこととなった。16時間のフライトを終えて成田空港に着いた際、コロナウイルスの検疫のための通路の壁に各国の言葉で書かれた「歓迎」の文字の中の右下に「Bienvenido」がいたのである。なぜか少し心があたたくなくなった。

ノミネートNo.4「¡Ánimo!」。やはりなんといってもスペイン語といえばこの言葉に尽きると私は考える。「¡Ánimo! (がんばれ)」という言葉は口にする耳にするだけで言葉であるけれど何か言葉にできない力が湧いてくる感じることができるのである。元々この「¡Ánimo!」は、私たちTLP生とは切っても切り離せない関係にあるグレゴリー・サンブラーノ先生の口癖であり、大学におけるTLPの授業において私たちが少し悩んだり困ったりした際にはいつも先生がかけてくれた言葉である。私たちTLP生にとってはメキシコに行く前からの「流行語」であり、いわゆる「逆輸入」という形でメキシコ研修においても常に口にする耳にする言葉であった。特にグアナフアトの展望台へと登る際の長い階段が続く道において「Palabra mágica (魔法の言葉)」としてサンブラーノ先生がおっしゃった「¡Ánimo!」という言葉は今でも鮮明に覚えており、自然と先に進もうという気持ちになった記憶がある。

このように言語を勉強しているとお気に入りの言葉というのが必ず出てくると思うのでみなさんもぜひ勉強・旅行する際にはお気に入りの言葉を見つけてみてはいかがでしょうか。

最後に、時々姿を見せてはいつも優しく見守ってくださっていた受田先生、SIMカードを買うのを手伝って下さったりと研修の諸々を調整して下さった松枝さんをはじめとした旅行代理店の方々、毎日CEPEへ行く時もグアナフアトへ行く時もサンミゲルアジェンデへ行く時もどんな時も私たちのバスを苦勞ひとつ見せることなくいつも快く運転してくれたManuel、大学における座学の授業からずっと一緒にスペイン語を共に学びメキシコ研修においてもいつも笑って励ましてくれたグレゴリー・サンブラーノ先生、お見さんの立ち位置でありながらも常に私たちTLP生とおなじ目線に立ってメキシコ研修を楽しいものにして下さった西藤さん、すべての人たちに感謝の気持ちを述べて、このエッセイを終わりにしようと思う。¡Muchas gracias!



# 見える/見えない

小野 新之介

メキシコでは、川をほとんど見なかった。滞在最終日、UNAMの学生にメキシコシティの南東部にあるソチミルコに連れていってもらって、遊覧船に乗って水路をぐるっと回るツアーに参加したのだが、そのときに気づいてはっとした。私の実家は、10分も歩けば雑草だらけの河川敷だ。高校時代にお世話になった西日暮里も、荒川と隅田川をつくる低地と武蔵野台地のちょうど境目にあるし、歩いているとすぐに暗渠のすさまじい臭いにぶつかる。今ではすっかり生活圏となった渋谷も、「宇田川町」という地名を思い出せば、それは今は見えなくなってしまった川の存在をはっきりと主張している。レストランで水が無料で出てくるのは日本だけというが、そう考えて妙に納得してしまった。

他に日本にあってメキシコになかったものはなんだろうか。こういった探し方は、とくにその存在を普段はあまり意識していない場合、なかなか見つからない。電線も当然のように地上にはなかったが、それに気がついたのは到着してから1週間が経ち、グアナファトに移動したときだ。OXXOの看板の色が控えめだということは見てすぐにわかったのだが、不思議なものだ。

逆向きに考えても面白い。つまり、メキシコに行ってから、日本にはないと気づいたものはなんだろうか？こちらのほうが簡単かもしれない。2週間のメキシコ滞在のなかで、目についたもの、興味をひいたものを探していけばいいからだ。

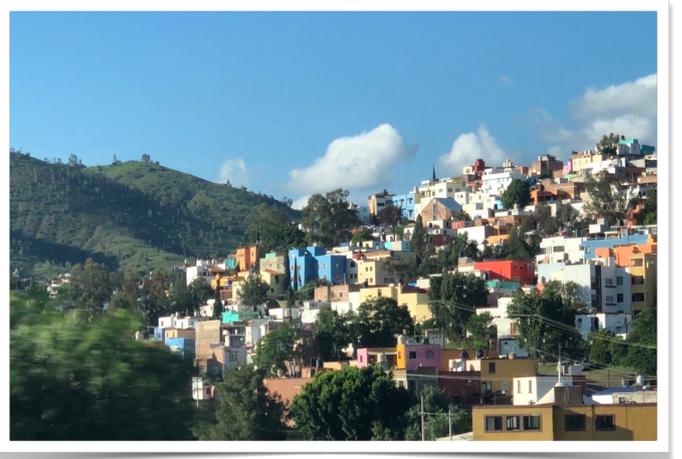
すぐに思い起こされたのは、グアナファト、サンミゲルデアジェンデ、ケレタロといった世界遺産都市の街並みの美しさだ。そこに住んでいるのはもちろん現代人だが、植民地時代の雰囲気や、目で見てははっきりと感じ取れる濃さで、しかも街全体で、残しながら生活している。では日本ではどうか？日本という範囲でみれば、これは日本にもある、と答えられるだろう。受田先生は、出発前の説明でグアナファトは京都に似ている、とおっしゃっていたが、なるほどその通りだと思った。

だがこういった世界遺産都市の景観よりも — 言ってしまうえばこれらは観光地だ — 今回の滞在で私のなかに強烈な印象を残していったのは、他でもない首都・メキシコシティがいかにも歴史を感じさせるつくりになっているか、ということだ。メキシコシティ滞在最終日には、CEPEで歴史の授業を担当してくださった先生のガイドで、メキシコシティ中心部の歴史地区を訪問した。Palacio de Bellas Artes, Palacio Postal, Zócaloなど有名な建物について解説を受けたのだが、その気になれば他の建物の一つ一つにもそういった解説をつけられるのではないかと思うほど、荘厳な建築が並んでいた。

それだけではない。市内の主要な通りがメキシコの独立に貢献した人物の名前を冠していたり、お札にしても日本のものよりも直接的にメキシコがたどってきた歴史を感じられる人選だ。私はヨーロッパの国々にも似たようなイメージを抱いているのだが、メキシコもこれほどまでに歴史が「見える」構造になっているのだということを実際に肌で感じて衝撃を受けた。

これで驚くのも、東京はそういうつくりにはなっていない、ということの証だろう。建物のサイクルが根本的に短いのだろうか、戦後に建ったビルもどんどん壊しているし、目まぐるしく変わり続けているような印象を受ける。変わらないのは、川と道路の張られかただろうか。川は土地の使い方を決めてしまう（いまだに地価にあらわれている）し、皇居を中心とする道路のネットワークも、大きい道路だけ取り出せば入り組んでいるようで実はシンプルで、構造はあまり変わっていないということがわかる。冒頭で暗渠の話題を出したが、地面の上にある建物ではなく、地面とその下に注意を向ければ、「見えない」だけで東京もしっかりと歴史を残しているのだろう。

どちらが良い、好きということをお願いわけではない。メキシコシティの「見える」歴史にも感動したし、特に観光客として、知識が浅い状態で訪れるときにはなおありがたい。一方で、東京を歩くときの、簡単には「見えない」構造に気づいたときの喜びもまた楽しい。メキシコに行って、向こう側から日本を見て、帰ってきてまたメキシコを眺めなおすという一連の作業を通して、街を歩くときの視点がまた一つ増えたのだ。こうやっていろいろ考えていると、また旅をしたいと思う。



# 演奏家とは

## 山下 順正

メキシコで一番印象に残っているのはマリアチ (Mariachi) というミュージシャンの集団である。街中やレストランでよく見られ、5人前後のグループで練り歩きながら演奏を披露していくのである。編成は様々であった。しかし、ギターに類似した楽器はどのマリアチでもあった。やや大きく、音域が低いギタロン (guitarrón)、そしてメロディ担当の小ぶりな5弦のビウエラ (vihuela) は初めて見るものであった。他にも12弦や16弦のものもあり、これまでごく一般的な6弦アコースティックギターしか弾いてこなかった私はそれらの多様性に圧倒された。手で弾く弦楽器の他にもアコーディオンやトランペットといったパートが参加している編成も多かった。マリアチが男性に限られたものではなさそうではあるが、私が遭遇したマリアチの演奏者はみな男性の方であった。

レストランにマリアチが登場してからの一連の流れは儀式のようであった。どこからとなく音楽が聞こえてきたと思うと、彼らが登場する。演奏を続けながら席の間に広がる。声を揃えて歌い、リズムに乗ってステップを踏む。ある曲が終わるとまた別の曲をそのまま始める。演奏が終わると客から帽子にチップをもらって回る。そして、どこかへと帰っていく。全体を通して10分程度であろうか。無駄な時間が一切なく、段取りが洗練されていた。限られた時間の中で最高のパフォーマンスを披露するために熟慮された手順のように感じられた。

マリアチの演奏者は、聴き手を楽しませようという心意気と、プロフェッショナルとしての気概の2つを併せ持っているように思えた。まず前者について、彼ら自身が楽しみながら演奏していた。音楽に合わせて踊り、時折演奏者の間で目を合わせる。彼らが音楽に音楽を演奏しているというよりも、彼ら自身が音楽であるという表現が適当だろう。そして、人々からの人気が高い曲を選び、聴き手の盛り上がりに応える。一言でまとめると、彼らは陽気なのだ。その一方で、職人気質のようなものも垣間見られた。音楽の対価としてチップを受け取ることを当然のこととして捉えていることが感じられた。また、楽器を触っても良いかと尋ねたところ、きっぱりと断られた。もちろん、破損を怖れたのこともかもしれないが、道具に対する強い思い入れもあるに違いない。一種のプライドを持ってマリアチとして演奏しているのである。このような二面性を持った彼らに非常に魅せられた。マリアチとの遭遇は自分にとって楽しいひとときであった。

マリアチとの比較で挙げたいのが、街中で見た先住民の音楽を披露していた男性であった。彼は一人で笛と小太鼓、そして脚につけたカラカラと音が出るパーカッション楽器を

操って演奏していた。試したことがなくても、3つの楽器を満身に演奏しながら踊るという芸当は常人には到底できるものではないと分かる。彼の演奏技術はかなり高かったであろう。しかし、立ち止まって聴く人や足元の箱にチップを置いていく人はほとんどいなかった。上手ではあるものの、彼の演奏には人を惹きつけるものが欠けているように感じられた。どうしてか。先程のマリアチの二面性に戻って考える。先住民の彼からは、演奏に対する自負は滲み出ていた。伝統的な芸能を披露していることへのプライドと言い換えても良いであろう。その一方で、聴き手を楽しませようとしている素振りが見られなかった。自分の演奏の世界に閉じ籠っていたため、聴き手からすると「何かやっているな」程度にしか思われぬのかもしれない。演奏のレベルが高いからこそ、惜しいと思った。

メキシコで2種類の演奏家を見た。この経験は、自分の演奏について考えるきっかけにもなった。私はアコースティックギターのサークルに所属していて、サークル内のライブにも積極的に出ている。アコースティックギターの歴が長いだけに、演奏技術には比較的自信がある。だが、観客を魅了するような発表はできていない。演奏後に「上手だった」との言葉をかけられることはあっても、それ止まりである。聴き手を引き込むためにはさらに技術を身につける必要があると考えていたが、マリアチの演奏を聴いて、その考えは間違いかもしれないということに気づかされた。技術を向上させても、聴き手を楽しませようとする意識がなければ、人々を惹きつけるような演奏を作ることはできないであろう。今後は練習を重ねて自分の演奏の世界を構築した上で、その世界に聴き手を誘うためにはどうすれば良いかについても考えたいと思う。

マリアチを聴いたことで、貴重な気づきを得られた。メキシコの街は、アーティストや露店などの思いがけない出会いに溢れている。国際研修での2週間は、そのような出会いを求めて再びメキシコに行きたいと私に思わせるものであった。



# メキシコ研修雑記

西藤 憲佑

本プログラム引率者の補助役として、メキシコで怒涛の2週間を過ごした。毎日様々な活動が用意されており、ほっと息をついたころには帰国していたように覚えている。そのなかで、TLP参加学生たちは学内の厳しい競争を経験してきた選抜組ということもあって、彼らのスキルやタフネスなどが光り輝く2週間でもあった。

振り返るとちょうど10年前の2012年、学部3年生だった私はグアテマラのスペイン語学校で1か月を過ごしたのち、1週間ほどメキシコシティに立ち寄った。今回のTLP参加学生とほとんど同じ年齢だったわけだが、彼らの活躍する姿に、当時の自分の幼さや弱さが重ねた。私自身にとってこの2週間は、メキシコの文化や歴史を深く学ぶ機会だっただけでなく、過去と現在の自分を見つめなおしながら、TLP参加学生たちから多くの刺激を受けた時間でもあった。

さて今回のメキシコ研修は、大きく分けて「(1)メキシコシティでの語学研修」と「(2)世界遺産都市での滞在を通じた異文化理解」で構成されている。(1)語学研修において、東京大学の提携校であるメキシコ国立自治大学

(UNAM)の附属機関「外国人教育センター(CEPE)」で、学生たちはスペイン語文法と、メキシコの文化や歴史を学ぶ2つの授業を受けた。言わずもがなスペイン語での授業である。最初は授業内容の理解に苦労していたようだったが、日を追うごとに語学レベルを目覚ましく上達させ、授業内容を着実に理解できるようになっていった。CEPEの先生方のコンパクトだが有意義な授業進行のおかげもあって、学生たちにとっては充実した語学研修だったのではないかと感じている。

各日授業が終わると、前植民地期からの文化遺産を展示する国立文化人類学博物館のツアーや、東京大学のもう一つの提携校であるメキシコ大学院大学(COLMEX)でのイベント、UNAMで日本語を学ぶ学生たちとの交流会などに参加した。とりわけ、受田先生のネットワークのおかげで、インフォーマル経済を専門とする先生や、ストリートチルドレンを支援するNGOの職員の方から話を聞く機会に恵まれた。学生たちは、日本や欧米諸国とは異なる国、ひいては途上国と呼ばれるような国の経済や社会の現状を知れたはずで、彼ら・彼女らにとってこの経験が何かしらの次の学びにつながることを願う。

私自身については、今までメキシコではなく、コーノ・スール諸国(アルゼンチンやチリ、ウルグアイ)を対象とした比較政治研究をおこなってきた。そのため、メキシコに関する知識をあまり持ち合わせていなかったが、今回現地の先生からメキシ

コの歴史や経済、社会を学べたのは個人的に得がたい経験だった。将来的にはラテンアメリカ地域に関することを広く知っているようになりたいため、メキシコでの学びをいくつか活かせるように日々研鑽を積んでいきたいところである。

(2)世界遺産都市での異文化理解では、およそ1週間かけて、世界遺産に登録されているケレタロやグアナファト、サン・ミゲル・デ・アジェンデの3都市を巡った。いずれの都市も旧植民地期の面影を残すコロニアル調の建築物と、現代の人々の生活環境が融合しており、メキシコの歴史や文化を五感で感じ取ることができる場所だった。また学生たちにとっては、メキシコシティでは治安上で自由行動が制約されていたが、グアナファトとサン・ミゲルでは治安が比較的良好いため、自分たちの思うままに行動してもらった。印象深かったことは、それぞれの学生がスペイン語を駆使しながら、土産屋の人と値段交渉をしたり、偶然出会う現地の大学生とコミュニケーションをしたりして、怖気づくことなく活発に行動していたことである。様々な都市を周遊することでメキシコの多面性を学びながら、磨いた語学力を発揮できた1週間だったのではないかと思われる。

最後に、研修期間は多様な活動が目白押しだったが、もちろん些細なことも私にとっては大切な思い出である。毎朝サンブラーノ先生と朝ごはんを食べるところから始まり、待ち時間や移動時間のなかで先生や学生たちと様々なことを話し合ったり、16人が入れるレストランを探すため歩き回り、お土産屋を巡って買いたいものが買えなかったり、体調を崩して一緒にホテルや病院に行ったり、今の時代だからこそそのPCR検査に行ったり…。一見大変なように見えることも実はどの一瞬一瞬も楽しくて、まずは学生たちにありがとうと伝えたい。そして、この研修を組んでくださり、未熟者の私の参加を許してくださった、受田先生とサンブラーノ先生には感謝してもしきれない。



# 編集後記

## 小野 新之介

編集を引き受けたはよいものの、この編集後記を書くにあたってはやはり、この報告書ははたして誰に届くのだろうか…？ということを考えざるを得ない。報告書が公開される場所でもあるラテンアメリカ研究センターの方々か、あるいはスペイン語TLPの後輩たちか…。いずれにしても、この最後のページまで辿り着いたということは、私たちの研修に何らかの形で興味を持ち、上のエッセイのいくつか（あるいは全部）をすでにお読みいただいたということだろう。そうした方々の知的好奇心に、まずは敬意を表したい。

今回の報告書作成にあたっては、特に共通のテーマを設定されることはなく、一人ひとりが自由にエッセイを書く、という形式で進められた。結果として、それぞれの感性が素直に表現された、幅の広い報告になったのではないかと感じているが、皆さんの目にはどう映ったのだろうか。

私は感想はどうかといえば、個人的に注意を引いたのは、多くの参加者が、メキシコの経済格差をいろいろな形で強烈に感じていたということだ。この研修の大きな目標の一つは異文化理解であるが、海外からやってきて2週間滞在するだけでは、おそらく普通の観光であれば一面的な理解にとどまってしまうだろう。それがこの研修では、CEPEでのculturaの講義、COLMEXでのLa Economía Popularについての講演、EDNICAのストリートチルドレン支援についての講演、そして一年半にわたるスペイン語学習の成果としての、いろいろな街での私たちとメキシコの人々とのコミュニケーションと、これだけ多くの視点からメキシコの文化やリアルな生活を理解する手がかりを得られるプログラムが組み立てられており、全員にとって学びの絶えない2週間だったように思う。

異文化理解、という言葉に絡めて、この研修の興味深い側面をもう一つ紹介したい。研修に参加した私たちの関係性について、だ。今回参加したTLPの学生で、スペイン語を自由に操れるレベルに達している人は一人もいなかったと

(Zambrano先生には申し訳ないのだが)断言できる。そのような、文字通り一人では生きていけない状況のなかでは、当然私たちどうして助け合って生活していくことが求められる。ところが、その私たちがお互いのことをよく理解していたかといえば、日本を出発した時点では、(少なくとも私に関しては)全くそんなことはなかった。スペイン語TLPは、時間割の編成上文系の学生と理系の学生は別々の曜限の授業を履修するため、お互いが授業で顔を合わせたことは一度もなかった。さらに一年生の間は授業はオンラインで実施され、文系の学生どうし、理系の学生どうしでも十分な交流ができていたとは言い難い状況だった。全員の自己紹介もまだ

終わっていない、そういう状態で私たちはメキシコに到着したのだ。

しかし一度始まってしまえば、知らない人と2週間も海外に…などという心配は無用だった。自ら志望してわざわざ授業数の増えるTLPに参加しているということも関係しているのだろうか、皆メキシコ人顔負けの活発ぶりで、帰国前にはホテルで集まって夜中まで話し込むくらいに仲良くなった。秋学期になればそれぞれの学科の専門科目の比重が高まり、興味の対象も付き合いを持つ人たちも、これから自ずと狭く深くという方向に進んでいこう、というまさにその切り替わりの時期に、こうして豊かなバックグラウンドを持つグループと知り合えたことは、すごく貴重なことだ。私たちの中にあつた小さな異文化交流もまた、この研修で得られた大事な財産の一つだと思う。CEPEでは、Zambrano先生が、数年ぶりに再会したご友人とも距離を感じさせることなく会話を交わしているのを何度も目にした。先生は、メキシコの人たちは一度の出会いを当たり前大切にしているけど、それは放っておいても得られるものではなくて、ちゃんと折にふれて連絡をとることが大事なんだよ、と教えてくださったが、私たちにもそれができるだろうか。

最後に、この報告書の結びとして、私たちのためにこの研修を準備し、日本、メキシコともに依然として新型コロナウイルス感染症の流行で様々な制約があるなかでの実現に尽力して下さった方々に、心から感謝を申し上げたい。受田先生と、松枝さんをはじめとする現地の代理店の方々、ホテルの手配、行程の作成、現地の大学・機関の方々との調整など、本研修の実現に必要な不可欠な土台を用意していただいた。Zambrano先生は、何よりもまず、一年半にわたってスペイン語TLPの授業を担当して下さった。さらにメキシコに行ってから、私たちの拙いスペイン語に辛抱強く付き合っただけでなく、細かなトラブルの際にもその都度心強い対応をして下さった。Museo de Antropología de Guerrero教授、COLMEXのAlba教授、EDNICAのBocanegra氏、そしてCDMXのCentro Historicoのガイドをして下さったPablo教授のほか、1週間にわたって私たちにスペイン語とメキシコ文化の授業を提供して下さったCEPEの先生方は、私たちが街を歩くだけでは気づくことのできないメキシコの生活や文化を知るうえで大きな手助けとなった。ドライバーのManuelさんは、時間にルーズな私たちをいつも笑顔で迎えて下さった。西藤さんは、私たちが見て、聞いてわからないものを解説してくれる貴重な日本語話者として、さらに自由奔放に動き回る私たちに最後まで付き合ってくれお兄さんのような存在として、私たちを支えて下さった。そして、滞在最終日に私たちとのCDMX散策に参加してくれたUNAMの友人たちをはじめ、現地であつた全ての方々へも感謝を伝えたい。私たちがメキシコ滞在中を楽しむことができたのは、メキシコの人たちがもつ陽気さ、温かさのおかげだからだ。

またの訪問と、この研修を通して出会った人たちとの再会を楽しみに、筆を擱こうと思う。¡Nos vemos!